



鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター

令和6年度 地域マネジメント 教育研究プロジェクト 報告書



令和 6 年度
「地域マネジメント教育研究プロジェクト」
報告書

目次

巻頭言

鹿児島大学法文学部長 藤内哲也	1
-----------------------	---

活動報告

1. 地域的特性を踏まえた新たな地域の文化的創生に関する取組み	
・ 奄美民謡の継承のネットワークに関する調査及び歴史的録音のデジタル化	3
・ 奄美大島大和村における地域資源果樹の利用に関する学際的研究	6
・ 地域と現代文化との関わりを発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト	10
2. 本学および地域が所蔵する歴史的・文化的資源の地域への還元	
・ 旧城下町鹿児島「博学連携」プロジェクト 2024	14
・ 沖永良部における島妻慣行と女子教育の伝統：奄美群島及び沖縄離島との比較研究	17
・ 鹿屋における〈水の記憶〉を未来に一水資源との豊かな共生を目指してー	19
3. 地域的課題把握とその解決に向けた取組み	
・ 奄美群島の経済・社会課題解決に向けた歴史資料利活用プロジェクト	24
・ 鹿児島の地域づくりに公民館が果たした役割の歴史的検証と現代への継承・発展ー鹿児島県日置市を事例にー	27
・ 与論島からの「移民」についてのオーラルヒストリー研究：森崎和江『与論を出た民の歴史』の「その後」	30
・ シマ社会の新たな知の循環に向けた奄美の集合的記憶形成に資する字誌の利活用	34
4. 教育・地域マネジメント人材育成プログラムの開発・推進	
・ 地域に生きる、歴史を生きる：高大生の歴史実践と協働型価値創造	38
・ 「種子島研究」の探索とアーカイブ化による教材および教育方法の開発	42
・ 島嶼の伝統野菜の維持・保存と教育への活用～伝統野菜と郷土の食文化を復活させる食育プログラムを通して～	46

積み重なるものについて 2024－2025

「鹿児島の近現代」教育研究センター 地域マネジメント担当 日高優介	51
---	----

令和 6 年度 「鹿児島の近現代」教育研究基盤整備事業 地域マネジメント事業について

「鹿児島の近現代」教育研究センター長 丹羽謙治	52
-------------------------------	----

巻頭言

鹿児島大学法文学部長 藤内哲也

幕末維新期に始まる日本の近代化の拠点の一つとなった鹿児島において、「近代」という時代は何をもたらし、地域社会をどのように変えてきたのか。そして、その「近代」は、いま私たちが生きている「現代」とどのようにつながり、いかなる課題を創り出してきたのか——こうした「鹿児島の近現代」に正面から向き合い、その政治や経済、社会、文化に関する諸課題に取り組むために、鹿児島大学法文学部では 2022（令和 4）年 10 月 1 日に「鹿児島の近現代」教育研究センターを設立し、さまざまな取り組みを行っています。

「鹿児島の近現代」に関する歴史的な教育研究のための基盤整備事業と並んで、本センターの活動の大きな柱となっているのが、「地域マネジメント教育研究推進事業」です。この事業は、鹿児島が誇る豊かな自然環境や歴史的遺産、地域に根差した固有の文化や習俗を地域資源ととらえ、それらを教育や研究に活用するだけでなく、地域の抱える諸課題に取り組む、その研究成果を広く還元して、地域社会の活性化に資することを目的としています。そのため、法文学部の学生や教員を中心として、他部局の教員や地域の諸団体、あるいは市民のみなさまと連携しながら実施する公募型の地域マネジメント教育研究プロジェクトを推進してきました。

本センターの開設から 3 年目を迎えた 2024（令和 6）年度には、（1）地域的特性を踏まえた新たな地域の文化的創生に関する取組み、（2）本学および地域が所蔵する歴史的・文化的資源の地域への還元、（3）地域的課題把握とその解決に向けた取組み、（4）教育・地域マネジメント人材育成プログラムの開発・推進の 4 分野において、あわせて 13 のプロジェクトが実現しました。本報告書は、各プロジェクトの具体的な内容と成果についてまとめたものです。これらのプロジェクトが、本学の学生・教員の関心に基づく多様な視点から「鹿児島の近現代」に切り込み、地域社会の抱える諸課題の解決と今後の発展をもたらす確かな一歩となることを願っています。

鹿児島大学法文学部及び「鹿児島の近現代」教育研究センターでは、この地域マネジメント教育研究推進事業を継続的に実施し、さらなる拡充を図ることで、地域社会の活性化に貢献したいと考えています。本センターの活動について、鹿児島大学の学生や教職員のみならず、そして地域のみならずのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

活動報告

1.地域の特性を踏まえた新たな地域の文化的創生に関する取組み

鹿児島県の伝統工芸や伝統芸能とその継承に向けた研究。現代アートを軸とした地域の有形・無形の知財の発掘と活用など。

- ・奄美民謡の継承のネットワークに関する調査及び歴史的録音のデジタル化

梁川英俊（法文学系）

- ・奄美大島大和村における地域資源果樹の利用に関する学際的研究

香西直子（農学系）、兼城糸絵（法文学系）

- ・地域と現代文化との関わりを発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト

太田純貴（法文学系）、菅野康太（法文学系）、農中 至（法文学系）、清水 香（教育学系）

「奄美民謡の継承のネットワークに関する調査及び歴史的録音のデジタル化」

プロジェクトの実施体制

プロジェクト参加者 梁川英俊（人文学科多元地域文化コース 教授）、アンニ（人文社会科学研究所博士後 期課程地域政策科学専攻 大学院生） 役割分担：梁川＝調査・資料収集、研究の総括、アンニ＝調査・資料収集

助成額

397,000 円

プロジェクトの目的

本プロジェクトの概要は以下の 2 点にまとめられる。①奄美民謡の継承は、今日では群島内及び本土における緊密な人的ネットワークによって支えられている。本調査では徳之島町井之川集落で継承されている夏目踊りを中心に、その実際を明らかにする。②奄美民謡は時代により歌唱スタイルが変化する民謡であり、過去の録音を保存することは研究上大変に重要である。昨年に引き続き民謡研究家・久保けんおの録音資料をデジタル化し、アーカイブ構築のための基礎作業を進める。

郷土芸能の継承と地域の声の文化の保存に関する以上の目的は、「『鹿児島県の近現代教育 研究拠点整備事業』」の主旨にも直結する。

具体的なプロジェクトの内容

本プロジェクトで実施した内容は上記 2 点の目的ごとに以下のようにまとめられる。

①梁川は 2024 年 8 月 16 日から 8 月 20 日まで徳之島町井ノ川集落の夏目踊りに参加し、夏目踊りのリーダーである町田進氏に取材した。8 月 17 日には夕刻よりハマオレに参加し、保科文次氏宅でご家族やこの行事に参加するために来島した本土在住の島出身者たちにインタビューを行った。その後、翌 8 月 18 日 9:00 まで徹夜で夏目踊り参加し、同日 18:00 からは井之川公民館でハマギノに参加した。8 月 16 日には徳之島の三味線教室の動向についても調査を行った。同日 18:30 から亀津の徳之島文化会館リハーサル室にて治井三味線教室の取材を行い、その後 21:00 から同じ場所で、唄者・中島清彦氏と泉サダ子氏に取材した。以上のような調査の過程で、奄美大島において伝統的な歌遊びをそのまま舞台に上げることを目的に始められた「奄美十五夜唄あしび」と比較する必要が生じたため、9 月 7 日に奄美市立奄美博物館でこの催しに参加し、出演者にインタビュー調査を行った。

②1960 年に『南日本民謡曲集』を出版して南九州の民謡を全国に紹介した民謡研究家・久保けんお（1921～1991）については、2024 年 3 月にブックレットを刊行したが、その執筆の過程で、生前の久保が鹿児島県立図書館に預けた録音資料の存在を知った。

オープンリール 72 本、カセットテープ 11 本、計 83 本からなる貴重な資料であり、今後の保存の重要性を考慮して、一昨年に鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターと奄美大島の瀬戸内町郷土館の二箇所に移管した。昭和 40 年代の群島での現地録音などを中心とした貴重な歴史的録音だが、劣化が著しくデジタル化が急務であった。本プロジェクトでは、昨年プロジェクトでデジタル化した分以外の 40 本のテープの一部のデジタル化を完了したが、残った分については他部局のプロジェクトに応募するなどして予算を得、結果としてすべてのテープのデジタル化を終えることができた。

具体的なプロジェクトの成果

本プロジェクトの成果は上記 2 点の目的ごとに、以下のようにまとめられる。

①井ノ川夏目踊りについては、保存会のリーダーである町田進氏にその歴史や継続にまつわる問題に関して詳しく話を聞くことができた。また夏目踊りの前に行われるハマオレ行事の際に、集落の住民である保科文次氏とその家族から、集落出身の本土在住者にとってのハマオレの意味を中心に取材することができた。さらに夏目踊りに実際に一晚参加し、その行事の雰囲気を感じるとともに、参加者にも話を聞くことができた。踊りが終了した日の夕刻に行われるハマギノにも参加し、年配者から過去の夏目踊りに関して貴重な証言を得た。会の終わりには、実際の踊りには参加しなかった年配者も交えての大人数での夏目踊りにも立ち会えたのは幸いであった。一方、徳之島の三味線唄に関しては、治井春代氏の教室を取材したほか、ベテランの中島清彦、泉サダ子両氏に取材することができた。徳之島の島唄には奄美大島のそれとは異なる独自の曲目があり、地元の三味線教室では数年前からこうした曲目を中心に練習を進め、大島のコンクールでも歌っていこうと努めている。本調査ではこのような傾向が現れてきた経緯を含めて、その動向に関する調査を行った。徳之島の島唄教室に関しては、令和 7 年度中に NHK 鹿児島によるドキュメンタリー番組の制作も予定されており、その際には本調査の成果が一般にも認知されることが期待される。なお、奄美大島で参加した「十五夜唄あしび」に関しては、公演終了後に出演者の一人である里朋樹氏にインタビューし、氏が出演した過去の公演との比較から現在のイベントの課題等について意見を聞いた。また、徳之島民謡と比較して奄美民謡のあり方等についても率直な意見を交わした。

②久保けんおの録音資料については、前年度と同様に専門の業者にデジタル化を依頼し、今年度は瀬戸内町郷土館所蔵のテープで昨年度デジタル化できなかった 18 本について、すべてのデジタル化を完了した。ただし特に破損がひどいテープには特別な作業が必要とされ、高額な費用がかかったため、鹿児島大学に移管された分はデジタル化ができないまま残った。そこで、改めて本学国際島嶼教育研究センターのプロジェクト予算に応募し、その分のデジタル化を進めた。それでも数本のテープが残ったが、鹿児島

の近現代教育研究センターの予算の残額を使用することによって、83 本すべてのデジタル化を完了することができた。

プロジェクトの成果物

<論文>

梁川英俊・アンニ「『歌掛け』と『歌遊び』」『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』第 92 号、pp.37-63 2025 年 2 月

アンニ「奄美島唄における伝承形態と表現様式の変容に関する研究－島唄教室を中心にして－」（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科 博士学位論文）

<書籍等出版物>

梁川英俊「豊穰の奄美」第 2 部「21 世紀の奄美島唄－伝統から何を受け継ぐか？」

『「鹿児島の近現代」教育研究センター 近現代センター通信』第 4 号、p. 2. 2023 年 3 月

<講演・口頭発表>

梁川英俊「夏目踊りに参加して」シマウタ研究会オンライン報告会 2024 年 10 月 24 日

アンニ「奄美島唄における伝承形態と表現様式の変容に関する研究－島唄教室を中心にして－」学位申請論文発表会 2025 年 2 月 15 日

梁川英俊「民謡研究家・久保けんおの仕事について」鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 第 247 回研究会 2025 年 4 月 21 日

<メディア報道>

梁川英俊「久保けんおの声」南海日日新聞 2025 年 7 月 3 日



ハマオレの風景



深夜の井ノ川夏目踊り

「奄美大島大和村における地域資源果樹の利用に関する学際的研究」

プロジェクトの実施体制

香西直子（農学部）、兼城糸絵（法文学部）

役割分担：香西＝調査、研究の総括、兼城＝調査・資料収集

助成額

408,000 円

プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、大和村でスモモ「花螺李」の栽培が受け入れられた理由を自然科学および人文科学的なアプローチにもとづいて明らかにすることである。奄美大島大和村では減反政策以降にスモモ栽培が本格的に導入され、いまや地域を代表する果樹となっている。しかし、なぜ温帯果樹であるスモモの生育が可能なのか、そしてスモモのようなある種の「外来種」がなぜ人々の生活に定着できたのかは不明である。本プロジェクトでは島嶼地域における近代以降の生業転換の一端を解明するとともに、地域資源果樹の過去と未来について文理融合的な視点から検討した。

具体的なプロジェクトの内容

（１）スモモの栽培環境および開花結実に関する調査

スモモ「花螺李」の発芽および開花条件を明らかにするため、2024 年 11 月から 2025 年 3 月にかけて、現地調査および鉢植え個体を使ったモデル実験を実施した。

（a）大和村における現地調査

大和村から 3 か所の「花螺李（大玉系）」の栽培園を選定して現地調査を行った：U 園（標高 16m）、M 園（標高 142m）、F 園（標高 290m）。樹齢は 7～8 年生の生産樹 4～5 樹を選定し、各短果枝に着生している休眠芽の発芽率と開花期を調査した。また、これらの発育に及ぼす温度の影響を理解するため、各園地にデータロガーを設置して毎時の気温を記録した。調査は大和村役場と鹿児島県農業開発総合センターの協力を得て実施した。

（b）鉢植え個体を使ったモデル実験

農学部附属農場学内農場で栽培されている鉢植え個体を用いて、発芽期の調査を行った。「花螺李（在来系）」、「花螺李（大玉系）」および比較対象として本土地方で栽培されている「サンタローザ」を供試した。11 月上旬から 2 月中旬にかけて枝を採取して水差しし、20℃条件下での発芽率を調査した。また、発芽に及ぼす温度の影響を理解するため、圃場にデータロガーを設置して毎時の気温を記録した。

(2) 島嶼地域における生業の展開とスモモ栽培に関する調査

(a) 近代以降の大和村における生業の展開

今回は近代以降の生業展開に焦点をあてて文献調査を実施した。特に、鹿児島県立図書館奄美分館において資料調査を行い、過去に大和村で実施された複数の大学の実習報告書を収集することができた。

(b) 人々の生活とスモモ栽培の関わり

複数回にわたって、大和村役場の職員、農協関係者、そしてスモモ栽培に関わってきた農家の方々へインタビュー調査を実施した。

具体的なプロジェクトの成果

本プロジェクトによって大和村においてスモモ栽培が受け入れられてきた理由のすべてが解明されたわけではないが、少なくとも栽培環境および開花結実の条件という当初の目標に対し、以下のことが明らかになった。

「花螺李（大玉系）」の発芽期について大和村で現地調査を実施したところ、標高が高く気温条件が低い F 園では 1 月下旬ごろに発芽し始めており（図 1）、U 園と M 園では 2 月上旬に発芽率が上昇した。これらの時期までの低温積算時間（12℃以下）はおおよそ 500～550 時間であった（図 2、図 3）。その後、2 月上旬に開花し始めたが、最高気温は 1 月下旬より上昇し始めており（図 2）、このことが開花を促進したと思われる。低温要求量をさらに詳しく調べるため、切り枝を使った実験を実施したところ、「花螺李（在来系）」と「花螺李（大玉系）」ではいずれも 12 月に採取した枝で発芽率し始めた（図 4）。この時期の低温積算時間はおおよそ 500 時間であり、現地調査と近い値であった。比較対象とした「サンタローザ」では、12 月に採取した枝は発芽しなかった。以上より、「花螺李」は 500～550 時間程度の低温があれば休眠打破し、その後の温度上昇により開花が促進されることが分かった。大和村は「花螺李」の生育にとって好条件な土地であると考えられた。

また、大和村におけるスモモ栽培の展開については、以下のことが明らかになった。「花螺李」は日本統治期の台湾からもたらされ、奄美大島で結実することが確認された後に栽培が始められた。大和村では減反政策をひとつのきっかけにして栽培が盛んになり、換金作物としての価値が高いことから現在も栽培が続けられている。

「花螺李」は 2 月中旬に花を咲かせ（図 5）、5 月中旬ごろに収穫期を迎える。基本的には年に数回肥料をやり、特定の時期になると病虫害駆除のための薬品散布を行う。そして、枝が大きくなると紐で引っ張って固定するといった作業が行われるが、それ以外は特に作業を必要としない。ある話者が「適当に肥料を与えておけばそのうち実をつけるようになる」と語るように、育てる手間がかからない作物だと認識されていることがわかる。

一方、大和村では住民（非スモモ農家）がアタリと呼ばれる場所でスモモを育てている様子がみられた。アタリとは自家消費用の野菜を育てるための小規模な農地のことを指

す。今回観察したアタリではスモモが5～6本植えられていたほか、その隙間を埋めるようにさまざまな野菜が植えられていた（スモモも野菜も自家消費用のことだった）。このようなスモモと野菜の共存は、アタリだけにとどまらずスモモ農家の畑でも観察された。通常、スモモ畑に野菜が植えられることはないようだが、大和村のスモモ畑では島野菜をはじめさまざまな野菜が植えられていた（図6）。これらの野菜は自家消費用の場合もあれば、出荷用に育てている方もいるという。これらのことから、アタリのように伝統的に培われてきた畑地での栽培方法がスモモ栽培の実践とも深く関わっている可能性があることがわかった。

以上を踏まえると、「花羅李」がもつ換金作物としての価値の高さもさることながら、「手間がかからない」という特性が大和村に定着した要因として大きいことが明らかになった。さらに、近代以降に導入された果樹栽培がローカルな作物栽培方法と密接に関わりながら実践されている可能性も明らかになった。

今回のプロジェクトを通じて「花螺李」の生育様相と定着過程について一定の知見が得られた。特に「花螺李」は近代以降のグローバルなつながりが発端となって導入されており、さらに気象環境も「花螺李」にとって非常に好条件であった。現在では地域経済を支える存在へと発展してきたスモモは奄美群島の中でも特徴的な存在だといえる。

プロジェクトの成果物

具体的成果物はまだないが、今後、「花螺李」がもつ価値を地域社会と共有するようなワークショップを行う機会を設け、研究成果を現地に還元していく予定である。

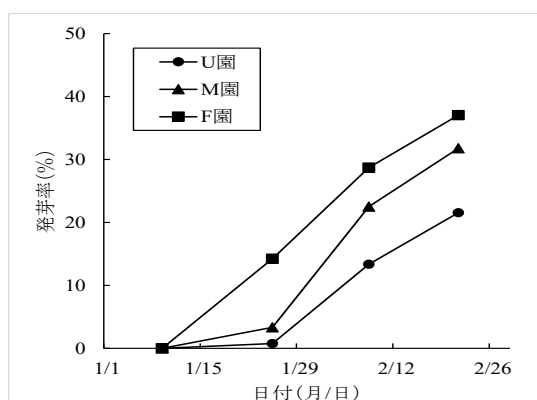


図1 各園地における芽の発芽率（大和村）

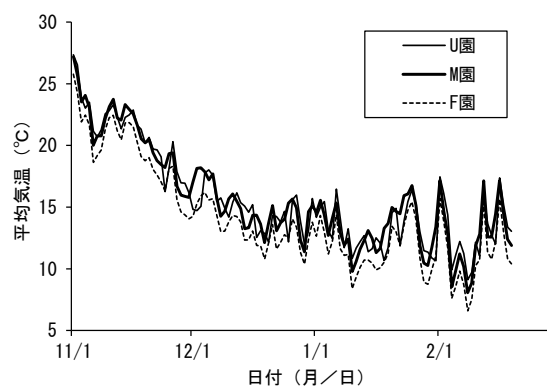


図2 各園地における平均気温（大和村）

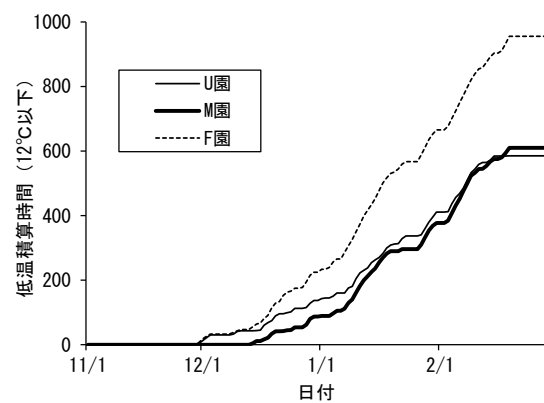


図3 12℃以下の低温積算時間（大和村）

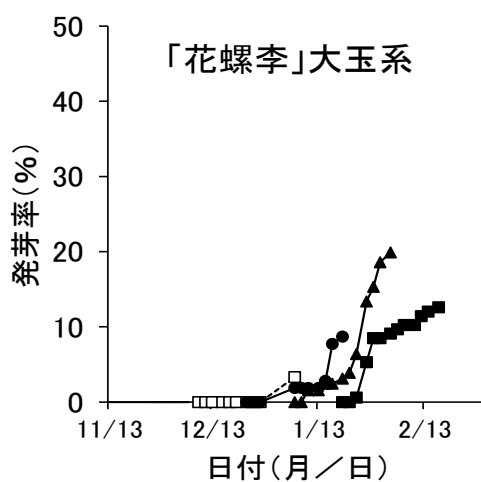
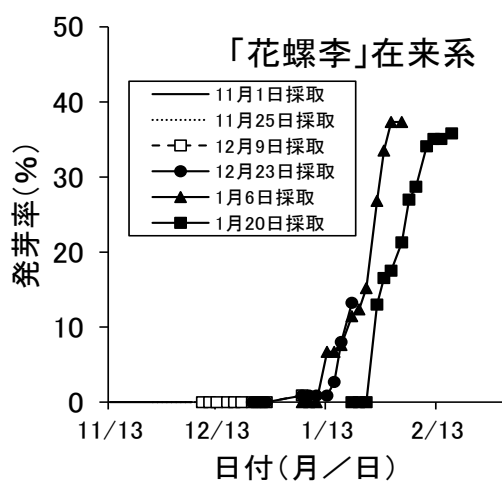


図4 切り枝法によるスモモ「花螺李」の発芽率（鹿児島市）



図5 「花螺李」の開花（大和村）



図6 スモモ園で栽培される島野菜（大和村）

「地域と現代文化との関わりを発掘・検証しその可能性を探求するプロジェクト」

プロジェクトの実施体制

太田純貴（法文学部人文学科 多元地域文化コース 准教授）、菅野康太（法文学部人文学科 心理学コース 准教授）、農中至（法文学部法経社会学科 地域社会コース 准教授）、清水香（教育学部美術科 准教授）

役割分担

太田：企画・コメンテーター・司会、菅野：コメンテーター・アドバイザー等、農中：コメンテーター・アドバイザー等、清水：コメンテーター・アドバイザー等

助成額

397,000 円

プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、アート・デザイン・イラスト・ダンス関係者の知見を軸に、地域と現代文化の関わりを複数の視点から検討すること、鹿児島県の人的・知的財産を発掘すること、そうした財産を活用する知見・資料を獲得することである。本プロジェクトは、地域の人的・文化的資源や関連する歴史の多角的な掘り起こしとなり、かつ将来地域を文化的に発展させる可能性を孕む要素への目配りとなる。それを学生や地域の人々が参加可能な場で共有することは、地域を支える人材の育成・連結・協同に繋がる。

換言すれば、本プロジェクトの目的は教職員・学生・地域市民を軸に、複数の水準で地域の文化を支えるインフラストラクチャーを構築することである。

プロジェクトの内容

本プロジェクトを遂行するために、4回のワークショップ（トークイベント）を開催した。

〈1. 地域とダンスとまちづくり：2024年11月29日〉

コンテンポラリーダンサーの大谷悠氏と本学の大学院生でありダンス研究を行なう上村基之氏によるトークイベントを開催した。大谷氏からは京都における青少年と児童を対象としたコンテンポラリーダンス、上村氏からは鹿児島県内外で行ってきたストリートダンスを軸に、地域・まちづくり・教育について話題を提供していただいた。

〈2. デザイン×地域×アート：2024年12月6日〉

京都で地域のクリエイターを支援してきたはがみちこ氏（京都市立芸術大学芸術資源研究センター）と、鹿児島国体やゼロカーボンシティのロゴなどを作成するだけでなく、まちづくりとデザインと教育の関係も見据えながら鹿児島でデザイナーとして活動する久保雄太氏を招聘したトークイベントを開催した。

〈3. イラストとアートから考える地域と多文化主義：2024 年 12 月 13 日〉

ベルギーの近現代美術の専門家であり、国際観光学科で教鞭を取る利根川由奈氏（文教大学）と、鹿児島でイラストレーターとして活動する竹添星児氏を招聘したトークイベントを開催した。利根川氏からはベルギーという地域でアートやデザインが果たしている役割について、竹添氏からはイラストレーターという立場から徳之島という地域やツーリズム関与すること、およびそれらを通したまちづくりについてお話しいただいた。

〈4. ハブとしての大学：2025 年 1 月 28 日〉

1-3 を総括する意味も込めて、地域と大学生を結ぶ活動を継続的に行なっている松本健太郎氏（獨協大学）を招聘して、地域と大学の関わりを多角的に把握していくためのトークイベントを開催した。

プロジェクトの成果

プロジェクトの成果として、1.アートやデザインと地域との多様な関わり方についての把握、2. アートやデザイン、ポップカルチャーに興味関心を持った場合の進学や就職に関する展望の獲得、3. 地域と大学の関わり方についての知見の獲得が挙げられる。

4 回のトークイベントは、アートやデザイン、ポップカルチャーを焦点として鹿児島と他地域（京都・東京）を比較することで、鹿児島における文化や教育の支援に関して不足している要素や見落とされている要素、発信・活用していくべき要素を浮き彫りできた。そして教員や学生がそれぞれの立場から取り組んでいくべき事柄や活用できる事柄を明確にできた。例えば、地域の文化的なインフラを支え、かつ県外のデザイン等をめぐる状況に影響を及ぼしている『kagoshima illustrators file』を事例として、軽視されがちなフリーペーパーの地域の文化に対する重要性を認識することができた。また、ロゴやデザインは視覚的要素と物語的要素の組み合わせであるという知見を得たことは、参加者（特に学生たち）が直感的にわかりやすい視覚イメージにより鹿児島を表現する、もしくはそうした視覚イメージを読み解く一助となるだろう。

ダンスを研究対象として捉える視点を確保できたことは、身近な地域の文化を掘り起こしていくための一助となる。その際、イベント登壇者として本学の大学院生を招聘できたことは、参加した学部生に大学院進学というキャリアパスがあることを実感させる契機となったであろう。2024 年の京都賞受賞者が振付師・ダンサーのウィリアム・フォーサイス

であることを踏まえれば、今回のダンスをテーマとしたトークイベントを契機として、稲盛財団が創設した京都賞への注目度も高まることが期待できるだろう。

総括的に言えば、本プロジェクトにより、参加者はアート・デザイン・イラスト・ダンスといった現代文化に関する県内外の状況（特に京都と鹿児島）についての知見を獲得できた。それらを巡る状況が県内外、そして市内と島嶼でも多様であることや問題点も具体例を通じて知見を獲得できた。これらは、アートやデザインやイラストやダンスといった観点から、地域の教育・文化の振興に多角的に取り組むことのできる人材を育成する土台となるだろう。

平日の午後という時間帯での開催にも関わらず、今年度のワークショップにも学内外から多くの参加をいただいた。今年度は小学生や高校生といった方々の参加もあり、アートやデザインに関するこうした一般公開のプロジェクトが鹿児島大学で開催されていることが少しずつ浸透しつつあるのではないか、という感想をもったことを付言しておきたい。

プロジェクトの成果物

- 4回のワークショップに係るフライヤー（本学学生（太田ゼミ）による作成：第1回のフライヤーは加瀬ひかる氏、第2～4回は八代結南氏が担当）
- 太田純貴編『「地域と現代文化との関わりを発掘・検証しその可能性を探求するプロジェクト」活動記録』、2025年3月



活動報告

2. 本学および地域が所蔵する歴史的・文化的資源の地域への還元

地域の歴史・文化・社会に関する講演会やシンポジウム、古文書講座の開催。教育や観光、まちづくり、防災面での地域資源の活用など。

・旧城下町鹿児島「博学連携」プロジェクト 2024

小林 善仁（法文学系）、南 直子（法文学系）、永迫俊郎（教育学系）

・沖永良部における島妻慣行と女子教育の伝統：奄美群島及び沖縄離島との比較研究

中谷純江（総合教育学系）、中嶋晋平（法文学部）、先田光演（えらぶ郷土研究会）、
桂 弘一（和泊町議会）

・鹿屋における〈水の記憶〉を未来に一水資源との豊かな共生を目指して―

難波美芸（総合教育学系）、伴野文亮（法文学部）、川西基博（教育学系）

「旧城下町鹿児島「博学連携」プロジェクト 2024」

プロジェクトの実施体制

小林善仁（法文学部人文学科准教授）・南直子（法文学部人文学科助手）・永迫俊郎（教育学部准教授）

役割分担：小林＝地理的・歴史的分野の指導、事業の総括、南＝地理的分野の指導、学生支援、永迫＝観光的分野の指導

助成額

225,000 円

プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、明治初期の廃藩により旧城下町となった鹿児島市街地（鹿児島城跡を含む）の近代の地理的・歴史的状况とその変容過程を明らかにするとともに、得られた調査・研究成果を大学教育ならびに地域での生涯学習（博物館施設）などに活用することである。この点は、「『鹿児島の近現代』教育研究拠点整備事業」の目指す、本学や地域の所蔵する歴史的・文化的・地理的資源の調査・研究と地域への成果の還元はもとより、地域課題を踏まえたまちづくりと地域の社会教育・郷土教育にも資する地域振興の取り組みの一つである。

また、プロジェクトのもう一つの特色が地域の博物館施設と大学の共同実施である。本年度も昨年度から引き続き、鹿児島市立ふるさと考古歴史館（以下、ふるさと考古歴史館）と連携して下記の内容で行った。

プロジェクトの内容

本プロジェクトは鹿児島市街地を対象地域に設定し、「城跡」「寺跡」「繁華街」「郊外」の四つのテーマを数年がかりで地元の博物館施設と連携して調査・研究し、歴史的・地理的・文化的情報の収集とその活用方法の検討を行うものであり、今年度は近世鹿児島城跡の一部を構成した城山を対象にして事業を実施した。現在、城山は山の東半部を中心に天然記念物に指定されるとともに、令和 5（2023）年 3 月には従来の国史跡箇所山麓部の黎明館・図書館敷地が追加され、「国史跡 鹿児島城」に指定されている。

実施内容は、①従来の文献調査とフィールドワークによる情報の収集・分析、②古地図をはじめとする地理資料の収集・分析、③鹿児島市街地の近代的事象の相対化（鹿児島県内・県外）により他地域の事例との比較・検討の三つの取り組みを行った。まず①

では近世・近代の既知の文献から情報を収集するとともに、数度の現地観察を行い、取り分け城山を含む鹿児島城跡の調査では近世の山城や近代以降の公園開設に関する新知見を得た。

次に、②では昨年度に収集した街並み等を写した写真帳である明治 40（1907）年発行の『鹿児島県写真帳』の分析を進め、城山からの定番の風景の成立過程を検討した（図 1）。加えて、収集資料の画像データ化（デジタル化）の方法を検討した。

最後に、③旧城下町の鹿児島と比較対象として、福岡と熊本で写真帖などの資料調査（福岡県立図書館、熊本県立図書館、くまもと文学・歴史館）と両城跡などでの現地観察を行い、前者は令和 6 年 12 月 26・27 日、後者は令和 7 年 2 月 15・16 日に実施した。また、②との関連で京都市の資料公開施設（京都府立図書館、京都府立京都学・歴史館）を令和 7 年 3 月 8・9 日に視察した。

プロジェクトの成果

今年度の実施内容で得られた成果は四つある。一つには、調査を通じて近世・近代の城山の地理的变化に関する新たな知見が得られたことである。とくに城山公園の開設に関連して、①城跡の陸軍省から鹿児島市への譲渡過程②城山展望台の開設と定番の風景の誕生③城山登山道開鑿と植生の変化の 3 点を解明し、令和 6（2024）年 9 月 7 日に開催された「鹿児島城跡・山城シンポジウム―城山を語る」（鹿児島県文化振興課主催）でその一部を基調発表した。とくに②については、昨年度収集した『鹿児島県写真帖』の分析結果によるところが大きく、本センターで導入している新聞データベース「デジタル南日本新聞」の記事検索を利用したことで写真帖の皇太子への贈呈過程なども判明し、それらの成果を本学法文学部令和 6 年度後期法文アドバンスト科目「新聞から読み解く「鹿児島の近現代」」の授業に活用できた。さらには、城山からの眺めという地域の定番の景色については、城山から鹿児島市街地・鹿児島湾（錦江湾）・桜島を眺める風景写真の構図がどのように変化して現在の定番の構図が成立したのかを、複数の写真帖や画像データ、当時の市街地図や名所案内記などから検討・解明した。この点が成果の二つ目である。

三つ目には、昨年と同様に研究成果を大学の地理教育と地域の郷土教育・生涯学習に活用できたことである。法文学部令和 6 年度後期授業科目「地理学講義 A」のなかで近世の鹿児島城跡と城下町の景観と地域変化に関する内容を取り上げ、これに関連したフィールドワークを令和 7（2025）年 1 月 25 日に鹿児島城跡界限で実施した。参加した学生たちには、授業で得た知識をもとに、現地へ実際に足を運び、説明に基づいて自ら観察することにより、知識の定着と新たな気づきに役立った。

四つ目に「博学連携」の成果として、同年 4 月 6 日に城山エリアのまち歩き案内者を筆者が務め、昨年と同じくまち歩き素材の開発を視野にいた基礎資料（資料集）の作成とルート開発を行った（図 2）。まち歩きのノウハウ共有と情報提供・交換などからな

る「博学連携」の取組みは今後、行政や他の博物館施設などとの連携・共同実施にも繋がるものと考えている。

また、まち歩きに関するニーズは、地元はもとより国内外の観光客からもあることから、観光分野への応用が次なる課題と言える。とくに、近年急増する国際クルーズ船で鹿児島市街地を訪れるインバウンド客への対応が必要であろう。



図 1. 城山からの眺め ※『鹿児島県写真帖』明治 40（1907）年発行.



図 2. 城山エリアでのまち歩き ※ふるさと考古歴史館主催

「沖永良部における島妻慣行と女子教育の伝統：奄美群島及び沖縄離島との比較研究」

プロジェクトの実施体制

中谷純江（グローバルセンター教授）：調査・資料収集、研究統括

中嶋晋平（「鹿児島近現代」教育研究センター特任助教）：調査・資料収集、分析

助成額

397,000 円

プロジェクトの目的

地域の文化伝統（島妻慣行と女子教育）を女性の視点から捉え直すことにより、「ジェンダー平等」の概念自体を再考することを目的とする。最終成果として、西洋の個人主義を前提とした人権の観点と、伝統的社会で女性与えられた「生」を意思をもって生きることとの違いを考えるきっかけとなるような、地域の高校生向けの資料を作成する。

プロジェクトの内容

琉球支配の時代から薩摩藩直轄統治の時代を経て明治にいたるまで、エラブ社会の発展に尽力した指導者の多くが、琉球王府や薩摩藩から派遣された役人と島の女性との通婚から生まれた子孫であることはよく知られている。指導者たちについては、郷土史家により家譜や人物伝の調査が行われてきたが、彼らを産み育て、一族の地位上昇の起点となった島妻本人については、あまり記録が残されていない。また、島妻慣行が、社会（政治・経済、ジェンダー等）にどのような影響を与えてきたのかについては論じられてこなかった。本プロジェクトでは、奄美群島の他の島や八重山諸島との比較、あるいはヤマト（本土）との比較を通して、近現代エラブの社会や文化の特徴をマクロの視点から捉える。

プロジェクトの成果

9月7日-19日多良間島（中谷）と沖永良部島（中谷・中嶋）、11月24日-27日沖永良部（中谷）、3月5日-10日那覇と石垣島（中谷）で現地調査を実施した。沖永良部島では、島妻を祖先にもつことや琉球・薩摩の血が入っていることへの評価が他の島々に比べて高く、公然と語られるのに対し、例えば、喜界島ではどの家が島妻につながる家系なのかはあまり知られておらず、少なくとも公には口にされない。こうした背景には、女性（の教養や美貌）は家族や一族の社会的地位を上げる手段であるという認識が沖永良部にはあったことがわかった。また、他の奄美群島の島々（奄美、徳之島、喜界）と比較して、4倍以上の女子が明治大正期には師範学校に入学し、教員となって島の教育に尽力していたことも明らかになった。インタビュー調査では、男子には土地を女子には教育を与えると祖父が語っていたことを覚えている男性（60歳代）がおり、彼の叔母たちは東京の

大学まで行かせてもらっているのに、父や叔父は尋常小学校を出た後、島で農業をしていたという。この事例のように、近現代のエラブ社会では、女子教育に特別な価値が置かれていたことが、他の女性たちへのインタビューからも明らかになった。

比較のために実施した八重山諸島での調査からは、奄美と同様に島妻慣行は近代を通して明治まで見られたが、島妻への評価が時代において下がっていったことが誌史や民謡から明らかになった。多良間島にはシュンカニー節という民謡があり、島妻が子どもを連れて役人を迎える情景が謳われており、島妻の像がある。また、竹富島には島妻の大きな墓が作られるなど、島妻を積極的に評価する時代があったことが伺われる一方、戦後、社会が父系化を強める従い、ネガティブな評価がなされるように変わり、歌の解釈も変化していったことがわかった。

翻ってなぜ沖永良部では島妻への高い評価や女子教育への熱意が現代まで維持されたのかを考察することで沖永良部社会の構造や文化的特徴を明らかにすることができ、地域の文化伝統の再評価につながる。

プロジェクトの成果物

<論文・書籍等>

中嶋晋平『戦争体験から紡ぎ出す鹿屋と昭和の戦争』，鹿児島大学法文学部附属「鹿児島近現代」教育研究センター，2025年3月

中嶋晋平「戦前期の日本海軍と博覧会ー第1回内国勧業博覧会から軍艦博覧会までー」『Intelligence』25号，2025年4月

<口頭発表>

中嶋晋平「戦前期における海軍の広報と博覧会ー第1回内国勧業博覧会から軍艦博覧会までー」20世紀メディア研究所第183回研究会，2025年1月25日

中谷純江「近現代エラブ社会における女性の行為主体性」比較家族史学会 2024年度春季大会，静岡大学，2024年6月22日-23日

中谷純江「家族と共同体の再考：南西諸島における親以外の子育て慣習（島妻・妾・養子・奉公）に焦点をあてて」サントリー文化財団 2024年度研究助成『学問の未来を拓く』中間報告 2025年1月15日

中谷純江「婚姻・養子とコミュニティ：ミクロネシア・インド・日本」国立民族学博物館共同研究会『現代アジアにおける生殖テクノロジーと養育：ジェンダーとリプロダクションの学祭的比較研究』2025年2月11日

「鹿屋における〈水の記憶〉を未来に：水資源との豊かな共生を目指して」

プロジェクトの実施体制

難波美芸（総合教育機構グローバルセンター・講師）：研究の総括，肝属川流域の民俗知の人類学的分析

川西基博（教育学部・准教授）肝属川流域の自然環境の分析，自然科学分野の知見に基づく研究全体の指導と助言

伴野文亮（「鹿児島近現代」教育研究センター・特任准教授）：笠野原開発をめぐる地域歴史文化の保全と分析，地域との連絡担当

助成額

392,000 円

プロジェクトの目的

本プロジェクトは，鹿屋市を中心とする肝属川流域に存在する歴史民俗文化と自然遺産を保全し，未来に継承すべく，学際的なアプローチから取り組むことで，地域住民に対し水資源環境との豊かな関係性を構築する機会を創出することを目的としている。これは，地域に遺る歴史遺産・文化遺産・自然遺産を素材として「鹿児島近現代」のイメージを詳らかにし，成果を地域に還元することで研究成果の社会実装を目的として展開している『鹿児島近現代』教育研究拠点整備事業を補完する取り組みである。

具体的なプロジェクトの内容

9月27日～28日の最初の調査では，難波，川西，伴野が鹿屋市において昨年度のプロジェクトにおける主要インフォーマントを訪問し，今年度の調査に向けた説明と調査協力依頼を行った。鹿屋市街地では，バードウォッチを通して河川環境に対する住民の関心について話を伺い，川西は外来植物の様子などを観察して今年度の調査サイトの選定を行った。笠之原開発資料館では，伴野が行う聞き取り調査と資料保全についての説明を行い，対象となる資料の選定などを行った。加えて，高隈地区コミュニティ協議会を訪れ，川西が行う植生調査のサイトを巡見し，協議会の委員から話を伺った。

11月17日は，川西が教育学部2年萩野多美と山根大知とともに，高隈地区の河川と水田の植物を把握するための調査を実施した。本調査では高隈地区の棚田で，水田の雑草を中心に約80種を記録し，鹿児島本土では未記録の外来植物オムナグサと思われる個体を採集した。11月18日は同メンバーで鹿屋市街地内の肝属川本流で調査を行い，ホザキノフサモやエビモなどの在来水生植物を確認したほか，特定外来生物の可能性が

あるミズキンバイ類を確認し、分布地点を記録した。肝属川の中流から下流にかけて複数の地点で水生植物の調査を行い、各種の分布状況を把握した。

12月1日は、伴野が法文学部3年生の川崎寿美と、2年生の宮井香奈・森咲良の3名とともに、笠之原開発資料館が所蔵する古文書の整理作業を実施した。この作業によって、「大正貳年旧十二月三日 資本金計算帳」や「昭和五年七月吉日 各年小作料要項」といった、主に大正時代から昭和時代にかけて作成された文献資料計99点について、すべての資料を中性紙封筒に入れ、資料それ自体を未来に遺すための処置を施した。翌2日は、封筒に入れた一部の資料について、写真撮影によるデジタルデータ化の作業に従事した。

1月27日には鹿児島大学法文学部ラーニングコモンズにおいて、鹿屋市から市街地での河川環境に関わる活動を児童生徒たちと行っている中村なおみ氏をゲストスピーカーとして招聘し、ワークショップを開催した。鹿大生と教員たちがオーディエンスとなり、市街地を流れる肝属川の水質汚濁及び河岸環境の悪化を受けて「藻つとる作戦」をはじめとする住民活動が活発化し、水質が回復した歴史についての講演が行われ、質疑応答時には活発な意見交換が行われた。

2月19日は、川西が教育学部3年の有馬花琳、大峯千夏、大山悠成の3名とともに、高隈地区コミュニティ協議会の浜田氏、東氏の案内のもと、上高隈から下高隈地区にかけての河川沿いの植物の調査を行った。また、肝属川流域のその他の地域でも同様の植物調査を行った。2月20日には同メンバーで、下高隈地区吉ヶ別府集落の棚田の植物の調査を行い、棚田の所有者に周辺の植物についての情報提供をいただいた。また、高隈小学校において校庭でみられる植物の調査を行うとともに、地域の植物と関連した教育活動について聞き取りを行い、地域の水田や水辺の植物を小学校での教育に活用する可能性を模索した。

3月2日には、鹿屋市内のKITADA SARUGGAにおいて、プロジェクトの成果報告会を開催した。当日は、伴野がプロジェクト概要について説明した後、川西が「肝属川流域において注目すべき在来種と外来種」というタイトルで肝属川流域の植生に関する報告を行った。その後、笠野原地域の住民のライフヒストリー調査に参加してきた法文学部生3名が「笠之原の記憶を未来へつなぐー次世代の私たちに出来ることー」というタイトルで、様々な歴史資料に触れる体験をもとに自ら「問い」を立て探究した成果を発表した。両報告の後、来場者との意見交換を行い、鹿屋における豊かな水環境と歴史文化の保全と継承に関する方法をめぐって議論した。本成果報告会を踏まえ、今年度実施した取り組みを、次年度以降は小中高校と連携して実施するなど枠組みを拡張しつつ継続して展開いく見通しを得た。

具体的なプロジェクトの成果

本プロジェクトの具体的な成果は以下の4点である。

(1) 笠之原開発資料館が所蔵する地域資料（古文書）について中性紙封筒への封入を行い、必要な保全処置を施す事が出来た。また、同資料館を管理・運営する安藤一夫・ツル子夫妻に対するインタビューを通じて、笠野原地域の歴史文化をめぐる記憶（オーラルヒストリー）を記録化することが出来た。

(2) 川辺の調査においては、鹿屋市街地を流れる肝属川流路内の水草を確認し、出現種のリストを作成した。また、特定外来生物に該当するボタンウキクサの分布地点を記録し、ウスゲオオバナミズキンバイの疑いがある個体の標本を作製した。高隈地区では棚田とその周辺の植物相を記録し、鹿児島県本土で未記録の外来種オムナグサの可能性のある個体の標本を作製した。同地域の高隈小学校では環境教育に活用することを目的として校庭でみられる植物のリストを作成した。

(3) ワークショップを本学で開催することにより、地域の声を大学に届けることができた。「河川環境の保全」という実践が、実際には地域の児童生徒や高齢者とのつながりを生み出したり、市民が主体的に地域にコミットすることの重要性を学んだりといった派生的な効果を生み出している状況について、当事者の語りを通して、参加した学生と教員らと共有することができた。

(4) 上記(1)と(2)の調査には本学学生が参加したことで、地域と関わっていくことの重要性を学ぶきっかけとなった。(2)の調査においては、事前に実施したインタビュー講座を通して、学生たちはインタビューの方法論及びラポール形成と調査倫理を学んだほか、3月2日に実施した成果報告会では学生たち自身が鹿屋市民に向けて調査で得られた結果について発表をし、プレゼンテーション技術を実践的に学ぶことができた。さらに、報告会に参加した市民たちとの交流を通じて、自らが大学と地域とのハブとなり、市民との関わりを得ることができた。

プロジェクトの成果物

<ワークショップ>

2025年1月27日「鹿屋における〈水の記憶〉を未来に一水資源との豊かな共生を目指して」ワークショップ

<成果報告会>

2025年3月2日「鹿屋における〈水の記憶〉を未来に一水資源との豊かな共生を目指して」成果報告会

<成果報告書>

難波美芸・伴野文亮・川西基博・宮井香奈・森咲良・川崎寿美「令和6年度地域マネジメント教育研究プロジェクト「鹿屋における〈水の記憶〉を未来に一水資源との豊かな共生を目指して」成果報告書」



(左) 肝属川での植生調査



(右) 成果報告会での学生による発表

活動報告

3.地域の課題把握とその解決に向けた取組み

奄美群島を含め南北 600 kmに及ぶ鹿児島県の地理的、歴史的條件に由来する課題の研究とその解決に向けたプロジェクトの企画実施など。

・奄美群島の経済・社会課題解決に向けた歴史資料利活用プロジェクト

澤田 成章（法文学系）、伴野文亮（法文学部）、日高 優介（法文学部）、鈴木 優作（法文学部）、金子 満（法文学系）、安藤良祐（法文学系）、三浦 壮（法文学系）

・鹿児島県の地域づくりに公民館が果たした役割の歴史的検証と現代への継承・発展―鹿児島県日置市を事例に―

酒井佑輔（法文学系）、農中 至（法文学系）

・与論島からの「移民」についてのオーラルヒストリー研究：森崎和江『与論を出た民の歴史』の「その後」

藤村一郎（総合教育学系）、酒井佑輔（法文学系）

・シマ社会の新たな知の循環に向けた奄美の集合的記憶形成に資する字誌の利活用

農中 至（法文学系）、高梨 修（「鹿児島県の近現代」教育研究センター）、小栗有子（法文学系）

「奄美群島の経済・社会課題解決に向けた歴史資料利活用プロジェクト」

プロジェクト実施体制

【鹿児島大学教員】澤田成章（法文学部）：統括、日高優介（「鹿児島近現代」教育研究センター）：A・B面、伴野文亮（「鹿児島近現代」教育研究センター）：A面、鈴木優作（「鹿児島近現代」教育研究センター）：A面、三浦壮（法文学部）：A面、金子満（法文学部）：B面、安藤良祐（法文学部）：B面

【鹿児島大学学生】法文学部および人文社会科学研究科の澤田ゼミ生

【大学外部】和泊町役場、知名町役場、食品総合研究所

助成額

540,000 円

プロジェクトの内容

・A面「奄美群島の歴史に関する重要資料の整理」

以下の2つのステップを通じて、奄美群島の歴史資料の利活用計画を整備し、奄美全体の歴史研究活性化に向けた基盤整備を行う。

ステップ1（知名町が保有する弓削正己氏の寄贈資料について学生と共に整理・粗目録作成を実施 ※知名町を委託者とする受託研究費を併せて活用）

ステップ2（12月に地域シンポジウムにてその成果を報告するとともに、弓削正己氏寄贈資料の今後の利活用について知名町役場に提案する）

・B面「すでに明らかとなっている地域課題の歴史的背景の探究」

すでに明らかとなっている奄美群島の食料供給体制の課題等に対して、学生が主体となってヒアリングや文献研究を実施する。

テーマ1：奄美群島の養豚業縮小メカニズムの解明

テーマ2：奄美群島の港湾整備前の食卓事情に関する研究

テーマ3：沖永良部の若年人口減少と部活動の変遷に関する研究

・地域シンポジウム「沖永良部の近現代」ー沖永良部の昭和ー

内容①：歴史資料の郷土教育への利活用や沖永良部台風襲来等のテーマを設定し、在沖永良部の郷土史家を交えたトークイベントを実施する。

内容②：学生の研究成果を地域に還元するため、ポスターセッションを実施する。

内容③：弓削正己氏寄贈資料の整理プロジェクトの1つの節目として、弓削コレクションの一部分を先行公開し、そのお披露目式を開催する。

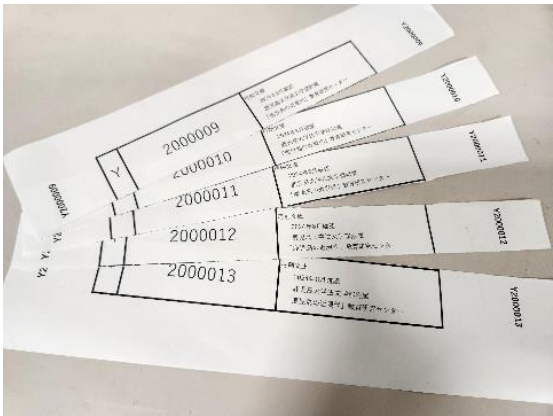
活動スケジュール

- ・第1回事前打ち合わせ（6月24～26日）
知名町役場を訪問し、赤地副町長や教育委員会池沢事務局長とともに、弓削文庫整理作業の今年度の到達目標や協力体制、実施スケジュールに関する打ち合わせを実施。また、知名町中央公民館の史料室等に保管されている弓削文庫の物量について大枠を把握。
- ・第2回事前打ち合わせ（7月21～23日）
作業スケジュールや作業計画について、赤地副町長や教育委員会池沢事務局長と共有。知名町中央公民館の史料室等に保管されている弓削文庫の現物を確認しながら、具体的な作業工程の確認作業を実施。
- ・弓削文庫整理作業（2024年8月19日～31日）
弓削政己氏寄贈資料について、整理作業を行った。作業の結果、全体の7～8割については個別の識別番号を付与し、エクセルシートに打ち込み作業が完了した。しかし、約2～3割については未完である。識別番号付与のルールと粗目録の概要は以下の通り。
(1) 下記の形式に沿った識別番号を史料1冊ごとに付与し、目録用 Excel に入力する。

識別番号コード：Y/ボックス番号/通し番号
(例：ボックス番号 20-2-2、通し番号 001 → Y2022001)

(2) 葉印刷用の Excel を印刷し、史料ごとに挟む。

(3) 識別番号付与済み史料のリスト化
(Excel に識別番号/資料種別/資料名/著者・発行主体/発行年/国立国会図書館書誌情報 URL/備考を一覧として打ち込み)



BOX 番号	箱番 ①	箱番 ②	通し 番号	資料ナンバー	資料種別	資料名	著者・発行主体	発行年 (書籍は省略)	国立国会図書館書誌情報URL	備考
01	2	3	005	Y0123005	リストから選択	打ち込み	打ち込み	打ち込み	コピーペースト	例
06	0	0	001	Y0600001	複写 (出典が明瞭な)	国際ハンセン病学会に関する資料	wikipedia			紙束
06	0	0	002	Y0600002	原本 (書籍)	虹を架けた男	笠井純一後援会			
06	0	0	003	Y0600003	原本 (書籍)	望雲亭の人々	操 担道			
06	0	0	004	Y0600004	原本 (書籍)	名字遺制の構造とその崩壊	木下彰			
06	0	0	005	Y0600005	原本 (書籍)	太平次 上	三沢明朗			
06	0	0	006	Y0600006	原本 (書籍)	海と稲と巫女は語る	甲東哲			
06	0	0	007	Y0600007	原本 (書籍)	南風の吹くシマで	松夫佐江			
06	0	0	008	Y0600008	原本 (書籍)	沖縄県政50年	太田朝数			
06	0	0	009	Y0600009	原本 (書籍)	幻の琉球 トカラ列島	尾竹敏亮			
06	0	0	010	Y0600010	原本 (書籍)	近思録 上	湯浅幸孫			
06	0	0	011	Y0600011	原本 (書籍)	わが奄美考ー奄美の心・方言・鳥唄ー	甲東哲			
06	0	0	012	Y0600012	原本 (書籍)	光仰ぐ日あるべし	国立療養所奄美和光園			
06	0	0	013	Y0600013	原本 (書籍)	焦がれて生きよ	出水沢藍子			
06	0	0	014	Y0600014	原本 (書籍)	命の斜め 演習 3 黒野公	山下文彦			

・地域シンポジウム“沖永良部の近現代”

12月4日：最終打ち合わせ

(知名町役場・和泊町役場)

12月5日：沖永良部高校交流会

(学生ポスターセッション) ※約40名参加

12月6日：地域シンポジウム“沖永良部の近現代”沖永良部島の昭和

午前の部：弓削文庫企画展示お披露目会
(約30名参加) 於知名町役場

午前の部：地域シンポジウム“沖永良部の近現代” (約40名参加) 於和泊町役場

具体的なプロジェクトの成果

弓削正己氏寄贈資料の整理作業では3つの成果が得られた。

①寄贈資料の粗目録作成

弓削政己氏が知名町に寄贈した6,565点の資料を整理し、それぞれ固有の識別番号を割り振り、粗目録を作成した。これは知名町教育委員会に提出している。

②一部先行公開による資料利活用の活性化

12月6日に知名町役場フラワーホールにて弓削文庫企画展示記念式典を実施した。弓削政己先生と知名町とのかかわりなどを中心としたポスターを作成し、資料の現物(一部)や粗目録、作業実施報告書とともに展示した。

③弓削文庫整理事業の報告書

8月に実施した弓削文庫整理事業の作業内容についての報告書を作成し、知名町教育委員会に提出している。

奄美群島の持続的発展に向けたボトルネックの探究では、法文学部および人文社会科学研究科の澤田ゼミ学生とともに実施した調査・研究内容を地域シンポジウム「第3回沖永良部の近現代」において報告した。地域マネジメント事業を通じてプロジェクトメンバーらが積み上げてきた成果の地域還元、および双方向的なコミュニケーション活性化による地域課題の掘り起こしを達成したと考える

地域シンポジウム“沖永良部の近現代”
沖永良部島の昭和

主催：鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター
共催：知名町・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 後援：和泊町
開催日：2024年12月6日(金)

午前の部
10:00～10:30
知名町役場
フラワーホール

弓削文庫企画展示記念式典

午後の部
13:30～16:30
和泊町役場
結いホール

連続トークイベント「#昭和99」
一色次郎ブックレット刊行記念特別講演
トークテーマ① 歴史史料の収集・保全・利活用
トークテーマ② 沖永良部台風の記憶

登壇者(鹿児島大学)
鈴木優作・伴野文亮・日高優介・澤田成章

登壇者(沖永良部島)
和泊西郷南洲顕彰会会長 伊地知実利氏
和泊町歴史民俗資料館 伊地知裕仁氏
知名町町誌編纂室 森田太樹氏

両会場ともに予約不要・入場無料です。ご自由に途中入退室いただけますので、お気軽にご参加ください。和泊会場では鹿児島大学生の沖永良部に関する研究調査内容ポスター展示を併設いたします。ぜひご覧ください。

写真：和泊町歴史民俗資料館所蔵、村山豊禧氏撮影

「鹿児島県の地域づくりに公民館が果たした役割の歴史的検証と現代への継承・発展―鹿児島県日置市を事例に―」

助成額

392,000 円

プロジェクトの実施体制

酒井佑輔（法文学部法経社会学科・プロジェクト統括）

農中至（法文学部法経社会学科・歴史研究）

【1】プロジェクトの目的

鹿児島県のコミュニティ施策および地域づくり諸政策においてその活動拠点となってきた条例公民館の役割や意義について鹿児島県日置市を事例に検証する。くわえて、その研究成果を学生や日置市の社会教育・公民館職員・関係者らと共有し、議論する機会を設けることで、鹿児島県のボトムアップ型の地域活性化へとつなげるものとする。

【2】プロジェクトの内容（活動・調査内容）

本プロジェクトでは、代表者が日置市と進めている共同研究「日置市地区公民館制度の再構築に関する実証的研究」（2022年9月～現在）を基盤に、以下の3点を実施した。

（1）日置市の社会教育や地域づくりに関わる関係者へのインタビュー・関係資料収集

日置市役所の地域づくり課・社会教育課や条例公民館の館長や支援員等の職員に対してインタビュー調査を実施した。調査結果から、条例公民館の果たしてきた役割や現状の課題が確認できた。ただし、関連する条例公民館の歴史的資料の収集は計画通り実施できなかった。今後の課題とした。

（2）（1）を踏まえ、2025年2月28日（金）午前、日置市の社会教育・地域づくりを考える関係者間の交流会、同日午後一般市民を対象とした日置市社会教育シンポジウムを開催



【図表1】シンポジウムのポスター

2月28日の午前中に行った交流会では、日置市長、日置市教育長、日置市社会教育・地域づくり課職員と本学研究者や学生、鹿児島県かごしま県民大学中央センター職員らを招いて日置市の社会教育・地域づくり課による対話の場をもうけた。交流会は総勢20名程度が参加し、日置市社会教育に期待する役割等を確認した。



午後の日置市社会教育シンポジウムでは、第一部に東京大学大学院教育学研究科牧野篤教授による基調講演を実施した。第二部は牧野教授や日置市教育長、文部科学省地域学習推進課課長補佐山川氏らによるパネルディスカッションを行い、日置市の条例公民館を基軸にする社会教育推進に向けた議論を行った。なお本シンポジウムは鹿児島県教育委員会および日置市教育委員会からの後援を受けた。



【図表2、3】交流会とシンポジウムの様

関連して、3月19日（水）には日置市吹上地域にてシンポジウムの議論を踏まえた、条例公民館を基盤とする社会教育推進に向けたワークショップを実施した。ワークショップには吹上地域の条例公民館館長が全員参加し、今後の条例公民館のあり方やそれにかかる地域の社会教育推進に向けて検討がなされた。今後も他地域でも同様の対話の場をつくっていく予定である。

（3）酒井ゼミの学生が中心となり、日置市の地域づくりに取り組む関係者の動画を編集・制作し SNS 等を通じて情報発信を実施

上記（1）から整理された日置市の地域課題（農林水産業振興や子育て支援の拡大、子ども・若者の余暇活動の充実）を踏まえ、ゼミの学生が関連施設を訪問したり、関係者へインタビューを行って動画を制作した。これらの動画は本学の公式 instagram や日置市公式 youtube との連携を通じて広く発信した。

【3】プロジェクトによる具体的な成果：現時点での課題と展望

本プロジェクトを通じて得られた具体的な成果は3点ある。まず1つは社会教育シンポジウムやワークショップの開催を通じて、研究成果を行政及び地域住民へと還元し、地域住民らと条例公民館を基盤にした社会教育の推進や地域の活性化について検討することができたことにある。2つ目は学生のプロジェク参加を通じて、①学生にとっての学びの創発、②地域での多世代の学びの環流をうながすことができた点にある。3つ目は、社会教育・公民館関係者と大学（教員と学生）、行政職員とのあいだで人的ネットワークを形成・強化できた点にある。なお、当初想定していたプロジェクト成果としての「これまでの本県における地域活性化や地域づくり政策に関する歴史的検証が可能となる」は十分できたとは言いがたい。したがって、次年度も鹿児島県からの事業委託等を通じて、演習単位で日置市と関わりながら調査研究を継続していく予定である。

【4】プロジェクトによる具体的な成果物

（1）酒井ゼミ及び鹿児島大学公式 instagram での動画

https://www.instagram.com/sakai_zemi.kadai/

（2）日置市チャンネルでのショート動画

<https://www.youtube.com/channel/UCokuRMHh6Lgy9IypeFXwhcQ>

【5】メディア掲載

「良い人間関係築いて」／日置市、社会教育の役割学ぶ

南日本新聞社 2025 年 3 月 9 日

「与論島からの「移民」についてのオーラルヒストリー研究：森崎和江『与論を出た民の歴史』の「その後」」

助成額

423,000 円

プロジェクトの実施体制

藤村一郎(総合教育機構・代表者/プロジェクト統括)

酒井佑輔(法文学部・移民研究担当)

プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は二つある。

第一に、戦中期以降に与論島より他地域へ転出した「移民」コミュニティへの聞き取り調査や文献調査を実施し、未解明の「移民」の歴史を明らかにすることで、「鹿児島近現代」を与論島および「移民」の視点よりとらえなおすことにある。

第二に、上記の調査考察を進めるなかで戦後日本思想において注目される雑誌『サークル村』の中心人物であり、『与論島を出た民の歴史』を執筆した森崎和江についての新たな分析視角を得ることにある。

プロジェクトの内容（活動・調査内容）

本研究では、『与論島を出た民の歴史』のうち大牟田・荒尾地区のユンヌンチュ（与論島出身者）に注目した。その理由は次のようである。

第一に明治期に集団移住〔500～700 人規模の大移動〕を 2 度経験していることにある。具体的には 1899 年から 1901 年までに与論島から長崎県口之津へ 750 人以上が移住した。ついで 1910 年には口之津より福岡県大牟田市へ 428 人が再移住した。これ以外にも与論島より移住があり、大牟田へ再移住したのちも 1916 年までに 50 人以上の規模で 4 回以上も移住が実施された。

第二に彼らは大牟田・荒尾地区を「第二の故郷」と位置付けたが、大牟田・荒尾地区の三井三池炭鉱において労働/生活面での差別的な待遇をしいられ、戦後最大の労働争議と言われる「三池争議」(1959-60)や、炭塵爆発(1963)の被害をめぐる裁判を経験した歴史的に特殊なコミュニティであることによる。

本研究は大牟田・荒尾地区のユンヌンチュについて以下の 4 つの領域よりアプローチした。

1 大牟田・荒尾地区与論会の調査

大牟田・荒尾地区与論会は、大牟田・荒尾地区在住のユンヌンチュについて最も網羅的かつ広範囲に組織する同胞団体である。資料の面でも聞き取りの面でもリソースは豊かである。

2 与論島を出た家族の歴史

与論島在住のI家とその親族について、島を出ていったもの、島に残ったもの、島を出て再び島へ戻ってきたものの6名より、家族・親戚の歴史について聞き取り調査を実施した。6名はI家の親族、各人が「与論島を出た家族の歴史」についてのエピソードをもっていた。

3 与論島を出た民による社会運動についての聞き取り

4 大牟田・荒尾地区ユンヌンチュについての思想的研究

分析視角

- a) コロニアリズムおよびポスト・コロニアリズム
- b) エスニック・アイデンティティの言説と行動、その歴史的推移の分析 大牟田・荒尾のユンヌンチュ・コミュニティには明らかにエスニック・アイデンティティを形成しようとした痕跡がある。
- c) コミュニティ内のジェンダー状況(与論島を出た女性たちには共通した時期、事情、考え方があるように観察される。)
- d) a)～c)の「インターセクショナリティ」状況
- e) 社会運動のファクションと理論(三池争議の際に分裂が顕著となり、エスニック・アイデンティティを形成しようとしたグループは第3の道を模索している。)
- f) a)～e)についての森崎和江のディスコースとの関係

プロジェクトによる具体的な成果：現時点での課題と展望

- 1) 大牟田・荒尾地区ユンヌンチュ・コミュニティの歴史には、**コロニアルないしはポスト・コロニアルな現象**が多く見られる。明治維新後より世界大戦期までにおいては、まさにコロニアリズムによって「移民」を余儀なくされ、「移民」後の生活や労働は一般的なタビンチュ（旅人、日本人）に比して明らかに差別的待遇のなかにあった。植民地研究領域では、日本に統合された与論島は、「**内的植民地**」(**internal colonialism**)と評価する研究がある。いったんこれを前提とすれば、「内的植民地」化された島から本土へ移住せざるをえず、そこでもまた差別的待遇を受け入れざるをえなかった大牟田・荒尾地区ユンヌンチュ・コミュニティはいまだ理論的に整理されていない。さらなる**理論化が必要**になっている。また、戦後においても与論島はしばらく米軍統治下におかれたために、島を出たユンヌンチュは故郷を奪われた。復帰後においても「移民」はやんだわけではなく、移住の理由や労働や生活においてポスト・コロニアルな現象が散見される。ポスト・コロニアルな現象の調査・分

析については今後の課題の一つである。

- 2) エスニック・アイデンティティは、差別の歴史やそれとの闘いの歴史が振り返られ、紡がれるなかで、言語化されていった。「おいがなんかしたつか!？」と叫びながら、なぜ差別されるのか、どうして労働者〔ないしは同胞〕のために闘争せねばならぬのか、自分は誰なのか?このような自問のうちに、連帯の理念や運動のあり方についての考察は深められた。S・W 氏を中心として、日本国内の**エスニック・アイデンティティの言説**を深く読み込む必要がある。これも直近の大きな課題である。
- 3) コミュニティ内のジェンダー状況は、新たに浮上した問題視角である。本来であれば森崎和江によって追求されるべき課題であろう。森崎はついにユンヌンチュ・コミュニティ内のジェンダー状況の分析について世に問うことがなかった。しかし、「**与論島を出た家族の歴史**」や「**与論島を出た女たちの歴史**」を検討することは、コロニアルないしはポスト・コロニアルな現象、最下層労働者とユンヌンチュとの連帯と「対立」、ユンヌンチュ・コミュニティの近代化と日本化（コロニアリゼーション）などを考える上で不可欠となろう。今後を展望する際、**ジェンダー状況、コロニアル状況、最下層労働者といった複合状況**は、次にみる「インターセクショナリティ」概念とあわせ考えることで重要な課題となると思われる。
- 4) 3)のような複合的な考察は、「**インターセクショナリティ**」(intersectionality)という概念によって整理できると考えられる。「インターセクショナリティ」とは複合的に交差する差別状況を把握するため近年に多用される概念である。「インターセクショナリティ」視角の優位性は、それぞれが独立した状態では生じない差別が存在することにある。コロニアルないしはポスト・コロニアル、人種、ジェンダー、社会的地位など複雑に絡まりあったアイデンティティを解析し、それらの複合体の存在がいかなる差別状況のなかにあったのかについての考察を深めていくことが重要な課題だと思われる。

プロジェクトによる具体的な成果物

<書籍>

山田良介編〔藤村一郎分担執筆〕『**ダークツーリズムを超えて-北海道と九州を結ぶ-**』北海道大学出版会、2024。

<記事>

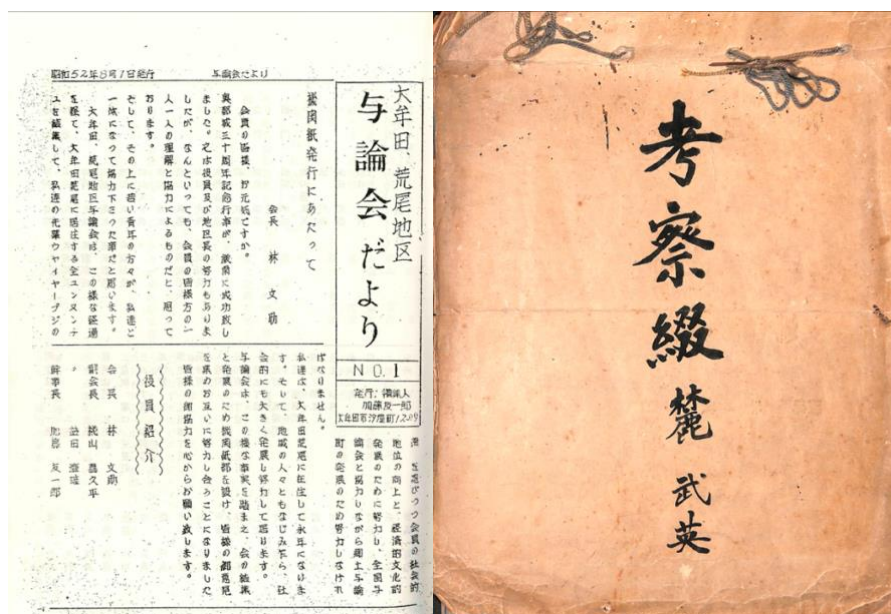
藤村一郎「資料『大牟田・荒尾地区与論会だより』について」『近現代センター通信』、2025/03。

<デジタル保存した資料>

- 1 『大牟田・荒尾地区与論会だより』第1号～140号、1977年8月～現在（ただし56、57号欠）

- 2 大牟田・荒尾与論会『口之津移住百年祭記念誌 与論島から口之津へそして三池へ』2001。
- 3 「新港町社宅関係資料」 大牟田・荒尾地区与論会保存資料
- 4 「麓武英文書」大牟田・荒尾地区与論会保存資料
- 5 堀栄吉「三池炭鉱労働者と家族の会の闘いに関する年表」2000 年 堀栄吉氏提供
- 6 「4・28 海上集会再現」2012 年 4 月 29 日 堀栄吉氏提供
- 7 沖縄県解放大牟田実行委員会『海上にとどろく解放の宣言 27 度線』1964 年。小冊子 堀栄吉氏提供
- 8 「沖縄小笠原返還要求福岡県実行委員会ビラ」1965 堀栄吉氏提供
- 9 「第 2 回 8・15 沖縄返還會場大会 大牟田地区代表団参加者氏名」(2010 メモ) 堀栄吉氏提供
- 10 「池田昭二さんを偲ぶ会 2001 式次第・年譜」三池炭鉱労働者と家族の会 堀栄吉氏提供
- 11 インタビュー記録 総計約 26 時間分

希少な資料を得ることができたが、一部は個人情報が多く含まれているために公開することはかなわないだろう。特に『大牟田・荒尾地区与論会だより』は個人名のみならず、住所や電話番号、個人の履歴まで記述されている場合があるからである。



(左) 『大牟田・荒尾地区与論会だより』第一号、1977 年 8 月。

(右) 麓武英「考察綴」年月日不明〔1940 年代前半と思われる 「麓武英文書」大牟田・荒尾地区与論会保存資料に収録〕。

シマ社会の新たな知の循環に向けた奄美の集合的記憶形成に資する字誌の利活用

プロジェクトの実施体制

農中至（法経社会学科地域社会コース准教授）、小栗有子（法経社会学科地域社会コース教授）、高梨修（「鹿児島県の近現代」教育研究センター客員研究員）

役割分担：農中＝統括・調査・資料収集、地域学習プログラム開発、小栗＝地域学習プログラム開発・運営、高梨＝調査・資料収集、地域学習プログラム開発・運営

助成額

225,000 円

プロジェクトの目的

本プロジェクトでは、二つの狙いを定めた。（１）奄美群島内全域の戦後字誌の目録化、（２）奄美群島の字誌を活用した地域学習プログラムの開発とシマ・字の学び直しの機会創出である。申請者はこれまで、占領期奄美・沖縄の青年団運動および社会教育の研究を進めてきた。そこで直面した課題は、奄美群島の占領期一次資料、戦後地域資料の散逸・消失という事態である。沖縄島と異なり、奄美群島・鹿児島県には公文書館が存在しない。沖縄県公文書館には沖縄占領期の教育公文書綴り、占領期青年団資料をはじめ資料が良好な状態で保管され、2018年に移転・新設された沖縄県立図書館には各島の郷友会誌、字誌が多数収蔵・公開されている。

一方で、鹿児島県の場合、奄美群島内に戦後集落誌・字誌がどの程度存在し、どのような形態・形式・内容となっているかについて不明な点が多く、資料的価値は高いにもかかわらず、群島内の字誌を総合的に把握しようとする試みはほとんどみられない。そうしたなか、奄美群島には沖永良部島や喜界島をはじめ一定数の字誌がみられ、奄美大島にも複数の字誌（または集落誌）が存在するという情報を得た。

そこで、本プロジェクトでは、奄美群島における戦後字誌の悉皆調査による目録の作成を通じた全数把握を試みようとした。その上で、それらの内容の解読・分析を目的とした学習組織をつくろうと試みた。学習組織は小栗・高梨がこれまで手掛けた「奄美＜環境文化＞教育プログラム」の修了生を中心に組織化することとし、研修の機会において字・集落誌等を活用した成人教育プログラムを実施した（2月に3名で実施）。

具体的なプロジェクトの内容

まず、（１）の奄美群島内全域の戦後字誌の目録化については、プロジェクトの期間中にすべての作業を完遂することができなかつたため、今後の課題として残されている。完全な形で目録の作成についてはあと数年かけておこなう。なお、この間に判明した事実はずつぎのとおりである。第一に、沖縄県立図書館による字誌・集落誌・郷友会誌の収蔵・

公開は鹿児島県立奄美図書館にみられないという点である。奄美群島内各集落の史資料および記録保管に関しては、瀬戸内町立図書館の所蔵が優位に多い。ただし、瀬戸内町立図書館は基礎自治体立図書館という性質上、町外の集落史資料を収蔵しているわけではない。瀬戸内町立図書館所蔵の集落に関する記録は、ほぼ町内に関するものに限定される。この収蔵資料の一覧化についてもすでに同図書館によってなされており、館内にパネルが設置されている。鹿児島県立奄美図書館にはこのような資料パネルは管見の限り見当たらない。なお、瀬戸内町立図書館とおおよそ同規模の図書施設として奄美大島には龍郷町りゅうがく館図書室があるものの、龍郷町の字誌・集落誌に関するものは確認できなかった。このほか、奄美市笠利公民館図書室、宇検村生涯学習センター「元気の出る館」図書室、大和村中央公民館図書室などの収蔵調査もおこなったが、わずかに宇検村の図書室に集落誌および移民史に関する資料が確認できた以外に、奄美大島の基礎自治体公共図書館での字誌・集落誌の複数の存在確認はできなかった。第二に、沖縄島の場合とは異なり、郷土・地域に関する資料を奄美群島では必ずしも「字誌」と称しないということが、タイトル調査から判明した。たとえば、宇検部落郷土誌編集委員会編『宇検部落郷土誌』（1996）のように「郷土誌」と称し、地域の最小単位を記録化したもの、瀬戸内町立阿木名小学校創立九十周年記念事業推進委員会・阿木名校区誌編集委員会編『阿木名校区誌』（1971）のように小学校区の範囲に合わせて「校区誌」と称したもの、西古見慰霊碑建立実行委員会『西古見集落誌』（1994）のように「集落誌」と称したものなど、集落の記録をめぐる名称は多岐にわたる。沖縄島の場合、図書館の蔵書検索で「字誌」と検索することで地域の資料探索が容易であるのに対し、奄美群島の場合は必ずしもそうではない。具体的な集落名を冠した情感豊かなタイトルの地域誌・史（斉藤赫『吾等の郷土於斉』（1994）、豊シズエ『わきやあ島久根津』（1988））も複数あり、字誌・集落誌の完全な調査には一定の時間を要することも付随的に明らかとなった。第三に、沖縄島の字誌の場合、編集委員会方式をよく目にする一方、奄美群島の集落誌・字誌は必ずしも住民による編集委員会方式の場合がそう多くないと現時点では判断できることである。少なくない集落誌が個人の名前で刊行されており、タイトルと内容からのみ基層の地域社会に関する資料であることが判断できる場合も少なくない。（1）の作業については引き続き地道な作業が必要となるが、今後、奄美市立奄美博物館や鹿児島県立奄美図書館の協力を得ながら進めていきたいと考える。（2）については、後述する。

具体的なプロジェクトの成果

以上の基礎調査、作業を踏まえ、2025年2月に字誌・集落誌を活用した成人教育プログラムを、高梨・農中・小栗の三名で実施した。以下では、（1）の成果もあらためて踏まえ、プロジェクトの成果をまとめる。

成果は大きく二つである。第一に、当初目的とした、字・集落誌の目録化の作業であるが、既述の通り、すでに部分的ではあるが奄美大島の瀬戸内町立図書館においてその作業

が進められていることが判明した。瀬戸内町では、館内展示の一環として瀬戸内町内の字・集落誌の一覧が作成されており、町内の字・集落誌の現時点での一覧化が完了していることがわかった。また、常時一般公開されているわけではないが、奄美市立奄美博物館には鹿児島県立奄美図書館よりも多くの奄美群島内の字・集落誌が収蔵されており、その実物も一部確認できた。以上のことから、現時点では字・集落誌の完全な目録化という当初の目的を達成できてはいないものの、所蔵館の確認および収蔵資料の確認・把握が完了している段階である（ただし、奄美大島内に限る。）。完全な目録化の作業は今後の作業として残されている。

第二に、内容の解説・分析・批評を目的とした学習組織をつくること（地域学習プログラムの開発）に関しては、小栗・高梨がこれまで手掛けた「奄美＜環境文化＞教育プログラム」の修了生を中心とした研修の機会において、字誌を活用した地域学習の試みとして、字・集落誌等理解促進に資する成人教育プログラムを実施した。2025年2月2日（日）には奄美大島奄美市において、農中と高梨の対談形式型講義をおこなった。受講生たちには実際に奄美市立奄美博物館収蔵の奄美群島内の様々な字・集落誌に実際に触れてもらうことができた。翌2月3日（月）は、高梨・小栗によって類似の形式の講義（学習コンテンツは同様で、進行のみ農中が不在）を沖永良部島で実施した。受講生の反応をみると、地域の史資料の存在にはじめて気づく者も少なくなく、この学習活動を通じて島民による奄美の近現代の問い直しが始まる兆しを感じられた。とはいえ、住民の多くの関心は現在にあり、また日常にあり、仕事や働くことにある。この奄美の近現代の歴史を日常の暮らしや生活とどう架橋しうるかは引き続き課題として残されている。

プロジェクトの成果物

2025年2月2日（日）於：奄美市奄美博物館（奄美大島奄美市）

「おしえて高梨さん！～集落誌・字誌・自治体誌・郷土誌（史）の10のこと～」
（地域学習プログラム）

2025年2月3日（月）於：おきのえらぶ島観光協会エラブココ（沖永良部島知名町）

「おしえて高梨さん！～集落誌・字誌・自治体誌・郷土誌（史）の10のこと～」
（地域学習プログラム）



（左）2025年2月2日（日）の奄美大島会場の一コマ

（右）2025年2月3日（月）の沖永良部島会場の一コマ

活動報告

4. 教育・地域マネジメント人材育成プログラムの開発・推進

芸術文化などの地域資源を社会に活用できるマネジメント人材の育成、小中高等学校と連携した歴史教育プログラムの開発など。

・地域に生きる、歴史を生きる：高大生の歴史実践と協働型価値創造

石田智子（法文学系）、伴野文亮（法文学部）、中嶋晋平（法文学部）、兼城糸絵（法文学系）、松井敏也（筑波大学）、村野正景（静岡大学）

・「種子島研究」の探索とアーカイブ化による教材および教育方法の開発

出口英樹（総合教育学系）、伊藤奈賀子（総合教育学系）、日高優介（法文学部）、鈴木優作（法文学部）

・島嶼の伝統野菜の維持・保存と教育への活用～伝統野菜と郷土の食文化を復活させる食育プログラムを通して～

一谷勝之（農学系）、小栗有子（法文学系）、中野八伯（教育学系）、山口幸彦（教育学系）

「地域に生きる、歴史を生きる：高大生の歴史実践と協働型価値創造」

プロジェクトの実施体制

石田智子（法文学部人文学科多元地域文化コース准教授）

兼城糸絵（法文学部人文学科多元地域文化コース准教授）

中嶋晋平（法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター特任助教）

伴野文亮（法文学部附属「鹿児島県の近現代」教育研究センター特任准教授）

村野正景（静岡大学情報学部情報社会学科准教授）

松井敏也（筑波大学芸術系教授）

役割分担：石田＝全体統括および調査・研究（考古学）、兼城＝調査・研究（文化人類学）、中嶋＝調査・研究（日本史・社会学）、伴野＝調査・研究（日本近現代史）、村野＝地域資料の記録・保存・活用に関する助言（博物館学）、松井＝文化遺産の記録作成および保存に関する助言（保存科学）

助成額

713,000 円

プロジェクトの目的

少子高齢化や過疎化の進行にともない地域の文化・歴史・伝統の担い手が不足し消滅が危惧される現在、地域社会と地域資源（文化資源・自然資源）の未来のありかたについて考える機会が必要である。本プロジェクトは、地域の中心にあり続けた学校に焦点をあて、地域資源の発見・記録・保存・活用に取り組み、新たな価値を創出する高校生や大学生の活動を支援することで、地域資源への幅広い興味関心をもつ地域人材や専門的知識・技能を備えた専門人材の育成に貢献することが目的である。活動成果を一般社会と共有することで地域へ知を還元し、地域資源にかかわる住民の主体的活動を促進することも目指す。

具体的なプロジェクトの内容

令和6年度のプロジェクトでは、①鹿児島県立指宿高等学校の探究活動支援、②鹿児島県立古仁屋高等学校の瀬戸内町まちづくり研究所の活動との連携、③鹿児島大学による地域資源の記録・保存・活用にかかわる実践活動、④奄美大島合同巡検の実施、⑤成果報告会の開催を実施した。

奄美大島合同巡検は2024年9月21日（土）～23日（月・祝）に計21名（指宿高等学校5名、古仁屋高等学校5名、鹿児島大学9名、筑波大学1名、近畿大学1名）で実施した。はじめに、瀬戸内町の近代遺跡に関する発表会を古仁屋高等学校で開催した。



写真1 古仁屋高校生の発表



写真2 西古見観測所内部の観察



写真3 安脚場戦跡公園の弾薬庫



写真4 集合写真（呑之浦）

まず鼎丈太郎氏（瀬戸内町教育委員会）から「鹿児島県奄美大島の戦争遺跡―奄美大島要塞跡を中心に―」と題して、瀬戸内町や国史跡奄美大島要塞跡の概要、戦争遺跡を調べる意義についての詳細な解説があった。次に、松井敏也教授（筑波大学）から、奄美大島要塞跡の三次元計測の成果について説明された。続いて、古仁屋高等学校の瀬戸内町まちづくり研究所部から「瀬戸内における集落活性化への取組―西方地区を中心に―」と題して、現地調査に基づく西方地区の現状と課題、集落活性化のためにできる取組みに関する高校生による発表が行われた（写真1）。その後は、瀬戸内町（奄美大島、加計呂麻島）に所在する国史跡「奄美大島要塞跡」をはじめとする戦争遺跡を中心に巡検するとともに、高校生と大学生が交流する機会を設けた（写真2～4）。合同巡検終了後は各学校でそれぞれに活動を実施した。

成果報告会を2025年1月25日（土）に鹿児島大学で開催した。第1部では基調講演として「文化遺産創造へのチャレンジ：地域資料への気づきから経営へ」と題して村野正景准教授（静岡大学）にお話いただき、文化遺産の価値体系を踏まえた文化遺産や価値創造に関する理論的枠組を共有した。第2部では、本プロジェクトの令和6年度活動概要を石田が報告するとともに、高校生・大学生が特に戦争遺跡の活用に焦点をあてた



写真5 鹿児島大学考古学ゼミの活動報告



写真6 ディスカッション

活動成果を報告した。指宿高等学校は「指宿高校の戦跡探究」、古仁屋高等学校は「戦争遺跡を活用した地域活性化について―史跡奄美大島要塞跡を中心に―」（リモート発表）、鹿児島大学考古学ゼミは「足元に眠る戦争の痕跡―文化財から見る瀬戸の過去と地域貢献―」と題して発表した（写真5）。報告後は参加者全員でディスカッションを行った（写真6）。地域活性化のターゲットが誰なのか（地域内部、外部）、戦争遺跡にともなう「負の記憶」等の背景も含めた活用なのか、なぜ地域の中で戦争にかかわる記憶が薄れていくのか等の質問が出され、高校生や大学生がそれぞれの立場やこれまでの活動を踏まえて回答した。次に、活動に参加した高校生・大学生がコメントを述べた。最後に、活動にかかわった米倉秀和教諭（指宿高等学校）、立神倫史教諭（古仁屋高等学校）、松井敏也教授、村野正景准教授からの講評をいただいた。戦争遺跡だけに注目するのではなく幅広く多角的な視点でみていくこと、地域の人との関わりを踏まえた近未来のありかたを考えること、事実の把握と自分の言葉で説明することの大切さが述べられた。また、活動を通して多様な人と関わる機会が生まれる点は重要であるが、活動を継続するためにはプラットフォームやハブとなるものが必要があることが指摘された。なお、成果報告会を記録した動画は、近隣自治体の文化財専門職員や学芸員とも共有した。各地域の地域資源の保存・調査・研究・活用を主導する立場である職員と理念を共有することで、今後さらに取り組みや連携事業が活性化することが期待できる。

具体的なプロジェクトの成果

令和6年度のプロジェクトは、地域の歴史や文化に関心をもつ高校生や大学生の活動に焦点をあてて取り組んだ。特に奄美大島合同巡検を実施したことで、高校生と大学生がそれぞれに取り組む活動を知ること、活動にのぞむ姿勢や活動内容をより深める契機になった。現地をともに訪れ、文化遺産だけでなく自然環境や人びととの交流も合わせて総合的に体験できるフィールドワークは、高大連携事業において有効な方法であることを認識した。身近なところで大学や大学生に接する機会の少ない地域の高校生は、大学生と触れ合うことで、学びを追求する姿勢や楽しさに刺激を受け、大学進学やフィ

ールドワークの実施への意欲が高まった。大学生も、学びの専門性が高まるにつれて視野が狭くなる傾向があるが、高校生や地域住民との触れ合いを通して、広い目線で物事を捉える大切さを意識する機会になった。合同巡検に同行した松井敏也教授は、古仁屋高等学校の生徒との交流を継続して活発に行っている。また、成果報告会の基調講演で文化遺産の価値体系について学んだことで、各自が取り組んでいる具体的な活動に対して理念的枠組を得るとともに、今後のさらなる活動にむけた発想につながった。

今年度のプロジェクトに対する大学生からの具体的な反応として、プロジェクト参加者が中心となり鹿児島大学公認サークル A.R.C (Archaeological Research Community) を結成した。考古学だけでなく多様な分野や他学部の学生も交えたサークルであり、令和 7 年度から活動を本格的に開始した。今後は大学生を主体とした巡検や調査研究活動に取り組む予定である。

令和 6 年度のプロジェクトの成果は報告書としてまとめ、連携事業にご協力いただいた関係者や機関に配布した。令和 4・5 年度の成果報告書と同様に、令和 6 年度の報告書も高校生や大学生の経験を学年をこえてつなぐ資料となる予定である。

令和 6 年度のプロジェクトでは、高校生と大学生の活動を結びつける一定の成果は得られたが、より深く相互作用するためには体験やアクティビティを取り入れた活動が必要であることを認識した。令和 7 年度以降のプロジェクトの実施で課題解決に取り組むとともに、これまでに構築してきた地域とのネットワークを活かしたさらなる展開を企画する。

プロジェクトの成果物

<報告書>

石田智子編『地域に生きる、歴史を生きる：高大生の歴史実践と協働型価値創造』令和 6 年度地域マネジメント教育研究プロジェクト報告書、2025 年 3 月 10 日。

<書籍等出版物>

中嶋晋平『戦争体験から紡ぎ出す鹿屋と昭和の戦争』鹿児島の近現代ブックレット No. 2、鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター、2025 年 3 月 1 日。

<講演・口頭発表（国内）>

石田智子「喜界島の文化遺産の価値—考古学からのアプローチ」、令和 6 年度奄美〈環境文化〉教育プログラムフォローアップ研修会、喜界町役場、2025 年 2 月 6 日。

中嶋晋平「終戦直後の鹿児島と奄美出身者」、第 4 回「鹿児島の近現代」連続トークイベント「#昭和 99」、鹿児島県立図書館、2024 年 10 月 14 日。

<メディア報道（国内）>

奄美新聞「戦争遺跡 高大連携で合同巡検」、2024 年 9 月 22 日。

奄美新聞「足元の歴史理解・発信」、2024 年 9 月 24 日。

南海日日新聞「戦争遺跡 高大連携で巡検」、2024 年 9 月 24 日。

「『種子島研究』の探索とアーカイブ化による教材および教育方法の開発」

プロジェクトの実施体制

出口英樹（総合教育機構 高等教育研究開発センター 准教授）、日高優介（「鹿児島
の近現代」教育研究センター 特任助教）、伊藤奈賀子（総合教育機構 高等教育研究開発
センター 教授・センター長）、鈴木優昨（「鹿児島の近現代」教育研究センター 特任
助教）

役割分担：出口＝現地調査・資料探索・プロジェクト総括、日高＝現地調査・資料探
索、伊藤・鈴木＝資料探索・活動補助

助成額

547,000 円

プロジェクトの目的

本プロジェクトは、昨年度の地域マネジメント事業の採択プロジェクト「『種子島研
究』の探索および電子アーカイブ化とその教育的活用」の継続プロジェクトとして実施
するものである。昨年度のプロジェクトでは、冊子「種子島研究」の現存状況、総目次
の作成、執筆者への聞き取り調査を実施した。また、一部の冊子について電子スキャン
を行った。

今年度は、地域の資源であるこの歴史・民俗資料等を初等・中等教育並びに高等教育
に活用すること、端的には教材と教育手法を開発し実践することを目的とする。具体的
には、鹿児島大学の学生が地域教育についての教育コンテンツを開発し、種子島高校や
西之表市の小学校などで実践する。これは、研究成果の教育界・自治体への還元という
「鹿児島の近現代」教育研究センターの目的に資する。

具体的なプロジェクトの内容

鹿児島を代表する民俗学者である下野敏見が創設に携わった鹿児島県立種子島高等学
校郷土研究部は、地域についての詳細な民俗学的・歴史的調査の成果を部誌「種子島研
究」として発表した。本プロジェクトはこれに焦点をあて、①「種子島研究」について
の追跡調査とアーカイブ化、② ①を活用した高等教育における地域教育の方法論の検
討と教材の開発、③ ①および②を踏まえて郷土資料を用いた初等・中等教育における地
域教育の方法論の検討と教材開発、以上の３点を柱として活動した。

本年度は中でも特に「初等教育（＝小学校）における教材の開発」に重点を置
き、本プロジェクトに興味のある３名の本学学生とともに次のような活動に取り組ん
だ。ここでいう教材とは絵本（または紙芝居）を想定しており、（Ⅰ）「種子島研究」か
ら子どもたちが興味を持ちそうな昔話をいくつかピックアップし、（Ⅱ）それらの昔話に

関して現地調査も踏まえて絵本として採り上げる題材を3つ程度セレクトし、(Ⅲ)セレクトした昔話を絵本化し可能であれば実際に小学校等で教材としての有効性を確認する。なお、プロジェクトに協力した学生は全員が総合教育機構の開設する地域人材育成プラットフォームにおける「かごしま地域リサーチ・プログラム」の受講生である。

(Ⅰ)「種子島研究」から子どもが興味を持ちそうな昔話をいくつかピックアップ

まずは「種子島研究」から絵本とするトピックを10本程度ピックアップした。その際、前年度のプロジェクトで作成した『「種子島研究」総目次』を活用した。また、そのピックアップした昔話について「種子島研究」本文で確認するため、同書が多く所蔵される鹿児島県立図書館（鹿児島市）において閲覧およびコピーの作業を実施した。

(Ⅱ) (Ⅰ)でピックアップした昔話に関して現地調査も踏まえて絵本の題材をセレクト

次に、(Ⅰ)でピックアップした昔話について現地調査を行い、絵本の題材として妥当なものを3本程度に絞る作業を行った。このため以下の3度のフィールドワークを実施した。

- ・2024年11月30日～12月2日：安納地区を中心に調査、安納小学校と打ち合わせ
- ・2025年2月13日～2月14日：全島のフィールドワーク（2日間）
- ・2025年3月1日～2日：全島のフィールドワーク（3月2日、なお3月1日は「種子島シンポジウム 2025」に参加、以下の「プロジェクトの成果物」に詳説）

(Ⅲ) 実際に絵本化し可能であれば小学校等で教材としての有効性を確認

最後に、ここまでの活動を踏まえ絵本化する昔話を確定し絵本化を試みた。ただし、実際は絵本化まではできず、物語を象徴化したイラストを作成し、それを見本として閲覧できるよう製本した。また、小学校等でのトライアルはできなかったが、上記3月1日の種子島訪問の際、「種子島シンポジウム 2025」において本プロジェクトについて発表し、参加者からコメントを受け取ることはできた。

具体的なプロジェクトの成果

「種子島研究」を地域の歴史・民俗に関する貴重な資料と捉え、初等・中等教育並びに高等教育に活用すること、端的には教材と教育手法を開発し実践することを目的としてプロジェクトを実施した。その具体的活動として、鹿児島大学の学生3名（福田祐真〔工学部4年生〕、上川路亮太〔法文学部2年生〕、三方麻由〔農学部2年生〕）とともに地域教育のための教材として絵本を作成し、種子島内の小学校などに活用しその効果の測定を試みることを目指した。

本年度の成果として強調したいのは、絵本作成の下準備としてのフィールドワークの実施と、それに基づいた絵本の内容の確定、そして絵本のサンプルの作成である。フィールドワークに関しては以下のような形で実施した。

◆フィールドワーク（１）【2024 年 11 月 30 日～12 月 2 日】

地域住民が多く集まる安納地区における「安納フェスティバル」（12 月 1 日）に合わせてヒアリング主体のフィールドワークを実施した。また、安納小学校において本プロジェクトの紹介と同校における絵本活用の可否について同校校長および教頭とミーティングを行った。

〔メンバー：出口英樹、日高優介〕

◆フィールドワーク（２）【2025 年 2 月 13 日～2 月 14 日】

絵本の題材となる昔話のエリアを中心にロケーション確認を主体としたフィールドワークを実施した。特に学生の声を反映させてエリアを選定した。また、種子島高等学校において本プロジェクトについて同校校長および教頭と意見交換を行った。

〔メンバー：出口英樹、日高優介、上川路亮太、三方麻由〕

◆フィールドワーク（３）【2025 年 3 月 1 日～2 日】

例年開催される「種子島シンポジウム」（3 月 1 日）に合わせフィールドワークを実施した。シンポジウムでは本プロジェクトについてポスター発表を行い、参加者と意見交換を行った。また、2 月と同様にロケーション確認のためのフィールドワーク（3 月 2 日）も実施した。

〔メンバー：出口英樹、福田祐真、上川路亮太、三方麻由〕

また、絵本のサンプル集は、「安姫」（安城地区、出典は「種子島研究」第 4 号〔1965 年〕）、「鳩ヶ瀬」（榕城地区、出典は「種子島研究」第 16 号〔1978 年〕）、「光る石」（国上地区、出典は「種子島研究」第 16 号〔1978 年〕）という種子島に伝わる 3 つの昔話をピックアップし、それぞれについて内容を象徴する絵を 3 枚ずつ作成して掲載した。「安姫」と「光る石」については画像生成 AI を活用し、「鳩ヶ瀬」は色鉛筆を用いた手描きで作成した。

本年度のプロジェクトでは絵本サンプルの作成までしか達成できなかったが、「地域資源の教材化」の第一歩は踏み出せたと考えている。このような取り組みは、研究成果の教育界・自治体への還元という「鹿児島近現代」教育研究センターの理念と軌を一にするものであると考えている。

プロジェクトの成果物

<書籍等出版物>

出口英樹・日高優介・福田祐真・三方麻由・上川路亮太『鹿児島大学「種子島研究」絵本化プロジェクト 絵本サンプル集』（鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」研究教育センター）、2025 年 3 月。

<成果発表>

種子島シンポジウム 2025 ～つぎにわたす みらいのタネ～（主催：種子島オーブンプラットフォーム、後援：鹿児島県・西之表市・中種子町・公益社団法人化学工学会・一般社団法人プラチナ構想ネットワーク・芝浦工業大学・東京大学未来ビジョン研究センター・東京大学「プラチナ社会」総括寄付講座・JST COI-NEXT「ビヨンド・“ゼロカーボン”を目指す”Co-JUNKAN”プラットフォーム研究拠点」、日時：2025 年 3 月 1 日、会場：西之表市民会館ホール）にて出口英樹・福田祐真・上川路亮太・三方麻由がポスター発表。



（左上）「種子島シンポジウム 2025」（2025 年 3 月 1 日）でのポスター発表の様子

（右上）『「種子島研究」絵本化プロジェクト 絵本サンプル集』より「安姫」

（左下）『「種子島研究」絵本化プロジェクト 絵本サンプル集』より「光る石」

（右下）『「種子島研究」絵本化プロジェクト 絵本サンプル集』より「鳩ヶ瀬」

**「島嶼の伝統野菜の維持・保存と教育への活用
～伝統野菜と郷土の食文化を復活させる食育プログラムを通じて～」**

プロジェクトの実施体制

中野八伯（教育学部実習地技術専門職員）、一谷勝之（農学部農学科教授）、小栗有子（法文学部法経社会学科地域社会コース教授）、山口幸彦（教育学部講師）、

役割分担：中野＝島嶼域の調査収集および食育プログラムの実践、一谷＝伝統野菜の保存に関する助言、小栗＝島嶼域での調査に関する助言、山口＝食育プログラム授業デザインの助言

助成額

444,000 円

プロジェクトの目的

本研究は、「廃れゆく地域の伝統野菜を発掘・採集すること」「児童・生徒の協働的な学び、個別最適な学びに資すること」の二本柱からなる。国連食糧農業機関(FAO)によると20世紀に優秀な商用品種が流通したのと引き換えに世界各地の在来作物が80～90%消失する遺伝的侵食が起きたことを報告しており、作物の多様性の保全は世界的な課題となっている。

鹿児島県内各地の集落を調査し、収集した在来作物は110系統に及びそのほとんどが高齢者の手によって守られていた。これら現状を踏まえ、地域を知る教材としての“伝統野菜”を組み込んだ食育プログラムを実践した。

具体的なプロジェクトの内容および成果

【在来作物の調査・収集】

まず伝統野菜の発掘については、栽培されなくなった原因、伝統食や行事食における役割、地域の伝統行事と栽培暦との関係などを聞き取り、分析しまとめたものを本研究の基礎資料としている。

今回、「鹿児島の近現代」地域マネジメントプロジェクト助成金を利用し、小宝島、徳之島、沖永良部島、与論島において在来作物の調査を行った。小宝島ではカヤツリグサ1系統を、徳之島ではヤマイモ1系統、ラッカセイ1系統、サツマイモ2系統、インゲン1系統を、沖永良部島ではラッカセイ1系統、ヒョウタン1系統を、与論島ではインゲン1系統、ダイコン1系統、マメ1系統を調査収集することができた。収集した遺伝資源は聞き取った情報とともに鹿児島大学教育学部実習地で保存する。

【伝統野菜食育プログラムの実践】

児童生徒の学びに資する活動であるが、具体的には中野が保存保有する伝統野菜を教育機関のカリキュラムに導入した食育プログラムを実践する。このプログラムは栽培活動だけでなく、後世に種苗を繋ぎ地域へ啓発する活動も含む。どのようにしたら伝統野菜が後世に繋ぎ、守られるのか、個々が自分事として考え活動する中で地域への愛着を育みながら、非認知能力を養うというものである。

当助成金を用いて10系統（①伊敷長なす、②養母すいか、③鹿屋在来ラッカセイ、④出水在来ラッカセイ、⑤松原田だいこん、⑥こうきいも（在来サツマイモ）、⑦かわひこ（在来サトイモ）、⑧宝かぶ、⑨佐仁にんじん、⑩古志だいこん）を学習材とした食育プログラムを実践した。各校、栽培・収穫に加え、地域への啓発活動も行った。ここでは主な活動を簡単に紹介する。

- ①（伊敷長なす）鹿児島市立玉江小学校では種子（おいどん市場与次郎館）や苗（栄門市場）の販売、ラジオでの活動報告を行った。
- ②（養母すいか）日置市立鶴丸小学校では苗を地元自治会に頒布し、学校と地域一体となって栽培に取り組んだ。下養母公民館では地区住民と児童が共同で試食会も行った。
- ③（鹿屋在来ラッカセイ）鹿屋市立輝北小学校では伝統食「だっきしょ豆腐」を在来種で再現するため、伝統食作りに詳しい方を招聘し調理実習を行った。
- ④（出水在来ラッカセイ）出水市立大川内小学校では在来種と商用品種との味や形状、栽培特性をまとめ、リモート交流の場で発表を行った。
- ⑤（松原田だいこん）指宿市立開聞小学校では種子の販売、市役所で大根展示を行った。そらまめの会協力のもと、指宿図書館ではseed libraryとして種子の貸し出しを行った。
- ⑥（こうきいも）屋久島町立栗生小学校では地域への苗の頒布や児童が考案・調理した料理を地域の方々にふるまった。
- ⑦（かわひこ）屋久島町立神山小学校ではサンロイヤルホテルの天川料理長を招き、かわひこ料理3種を児童や地域の方々に披露した。
- ⑧（宝かぶ）十島村立小宝島学園では宝かぶ起源の調査、食味試験を行った。また隣島の悪石島や宝島にも種子を提供した。
- ⑨（佐仁にんじん他）鹿児島県立大島北高等学校では生徒が校内で栽培した伝統野菜を「龍郷町町制50周年記念 青空市場」で販売した。また、SDGsQUEST みらい甲子園鹿児島県大会に出場し、特別賞（鹿児島銀行賞）を受賞した。
- ⑩（古志だいこん）瀬戸内町立篠川小中学校は収穫した古志だいこんを地元食材給食週間に給食センターへ無償提供し、立浪部屋（同校出身力士・明生関所属）にも送付した。

現在、鹿児島大学教育学部実習地で保存・保有する在来作物は110系統に及ぶ。今後これら遺伝資源を順次教育機関で教材化し社会実装化に向けた取り組みを継続する予定である。

プロジェクトの成果物

<講演>

令和6年10月31日／11月7日

「双葉寮 講演会」 鹿児島県立市来農芸高等学校

参加者 25 名(市来農芸高校寮生)

令和6年12月15日

「奄美伝統作物研究会総会」 奄美市小湊福祉館

参加者 35 名(研究会員対象)

令和7年1月14日

「小宝島学園社会教育学級」 十島村立小宝島学園

参加者 30 名(小宝島学園教職員、島民)

令和7年2月18日

「学校給食等地元食材利用促進研修会」 鹿児島県北薩地域振興局農政普及課出水市駐在

参加者 20 名(北薩地区栄養教諭、出水市・阿久根市・長島町農政職員)

令和7年2月27日

「かわひこ創作料理お披露目会」 屋久島町立神山小学校

参加者 35 名(神山小教職員および5年生児童とその保護者)

令和7年3月2日

「龍郷町食育地産地消推進事業収穫祭」 龍郷町こども体験ほ場

参加者 45 名(事業参加児童とその保護者、龍郷町役場職員)

令和7年3月26日

「十島村食品アクセス確保対策推進事業調査報告検討会」 十島村役場

参加者 9 名(十島村職員等)

<社会貢献活動>

令和7年3月8日

高校生探究コンテスト SDG s QUEST みらい甲子園鹿児島県大会（同実行委員会主催）

鹿児島県立大島北高等学校 チーム名「トラベジャー」 鹿児島銀行賞受賞

<雑誌掲載>

「ちゃぐりん 9月号」家の光協会 42～47 頁 みんなで育ててつなごう伊敷長なす
鹿児島市立玉江小学校 ISP(伊敷長なす里帰りプロジェクト)の紹介

<メディア報道>

「みなみネット」玉江小・伊敷長なす苗の即売会	『南日本新聞』	2024年5月8日
「九州」玉江小・伊敷長なす苗次学年への引継ぎ式	『日本農業新聞』	2024年5月11日
「みなみネット」大川内小・出水在来ラッカセイ播種	『南日本新聞』	2024年6月1日
「鹿児島」大島北高・佐仁にんじんの探究活動	『全国農業新聞』	2024年6月28日
「社会」大島北高・佐仁にんじんの探究活動の発表	『南海日日新聞』	2024年7月13日
「みなみネット」小宝島学園・宝かぶ原産地特定実験	『南日本新聞』	2024年7月25日
「みなみネット」下養母自治会・養母すいか試食会	『南日本新聞』	2024年7月29日
玉江小・伊敷長なす活動報告	『FMぎんが』	2024年7月30日
「編集局日誌」伊敷長なすから持続可能な農業を考える	『南日本新聞』	2024年8月1日
「記者の目」養母すいかを後世に伝える	『南日本新聞』	2024年8月2日
「ひろば」伊敷長なすの伝統守り続けて	『南日本新聞』	2024年9月7日
「みなみネット」大川内小・出水在来ラッカセイ収穫	『南日本新聞』	2024年10月5日
「教育」附属小・探究的な学習の充実へ	『南日本新聞』	2024年10月29日
「かごしまンドリーム」玉江小・活動紹介	『フレンズFM鹿児島』	2024年11月23日
「企画広告」篠川小中・古志だいこん給食の紹介	『南海日日新聞』	2025年1月25日
「タワフレンド」大島北高・活動報告と青空市場案内	『あまみエフエム』	2025年2月2日
「農林水産」かのや姫小豆で地域おこしを！	『南九州新聞』	2025年2月9日
「every鹿児島」神山小・天川シェフによるかわひこ調理	『KYT鹿児島読賣テレビ』	2025年2月27日
「社会」龍郷町こども農業体験	『南海日日新聞』	2025年3月2日
「みなみネット」神山小・天川シェフによるかわひこ調理	『南日本新聞』	2025年3月7日
「社会」大島北高・みらい甲子園入賞	『南海日日新聞』	2025年3月9日
「社会」龍郷町こども農業体験	『奄美新聞』	2025年3月11日
「every鹿児島」玉江小・鶴丸小合同種子販売会	『KYT鹿児島読賣テレビ』	2025年3月22日
「newsおやつと！」玉江小・鶴丸小合同種子販売会	『KKB鹿児島放送』	2025年3月22日
「みなみネット」玉江小・鶴丸小合同種子販売会	『南日本新聞』	2025年3月25日
「かごしま」玉江小・鶴丸小合同種子販売会	『日本農業新聞』	2025年3月28日



写真 1 沖永良部島在来ヒョウタン“ひしょう”とその生産者（和泊町国頭）



写真 2 瀬戸内町立篠川小中学校の児童生徒と収穫した古志だいこん（瀬戸内町篠川）



写真 3 大島北高生徒による活動報告（あまみエフエム末広市場放送所）

積み重なるものについて 2024-2025

鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター
地域マネジメント担当 日高優介

令和6年度の地域マネジメントプロジェクトには13件の企画が採択された。振り返ってみて、三期目の地域マネジメントプロジェクトの特徴として、「過程」と「完結」という2つのキーワードを捉えられるのではないだろうか。初年度から採択されたあるプロジェクトの担当者からは、三年目のプロジェクトを終えるにあたり「一定のゴール」との言葉があった。このプロジェクトは初年度から一貫したフィールドを対象としていたが、プロジェクト内容は年々拡大していった。プロジェクトをすすめるにあたって、さらなる課題の発見や、地域との関わりの拡大があったということだ。とはいえ、「地域マネジメントプロジェクト」としては、今年度を一区切りとすることになった。今後もプロジェクトメンバーはフィールドとは関わり続けるが、それは「地域マネジメントプロジェクト」の枠に収まるものではない。そのような意味においても、地域マネジメントプロジェクトが果たしたスタートアップとしての役割は大きいのではないかと考える。

他方、また別のプロジェクト担当者からは「上手くいかなかった」という声もあった。過年度から採択されていた同プロジェクトは、採択初年度においては明確なプロジェクトの成果を示すことができたが、さらなるプロジェクトの拡大を試みた本年度において、当初の計画を十全にすすめることができなかったそう。プロジェクトをすすめるにあった、様々な障害が想定される。人的、経済的、スケジュール的な制約や状況のみならず、気象といった自然も壁となる。執筆者は昨夏、台風の影響で一週間離島に留め置かれた。複数の島嶼を有する本県ならではの出来事ではあるが、結果的にこの一週間におきた発見や出会いがのちに良い方向へと繋がることになった。

先の「上手くいかなかった」プロジェクトについて内容を伺うと、目的に掲げた「成果物」こそないものの、活動自体はプロジェクトの趣旨に沿うものをおこなっており、前年度のプロジェクトより発展している状況があった。これらのことから、地域マネジメントプロジェクトの意義は、必ずしも当初設定された「完結」の形にのみ求められるものではないのかもしれない。「一定のゴール」を迎えたプロジェクトは、その過程で培われた地域との繋がりや得られた知見を土台に、新たな段階へと進んでいく。一方、「上手くいかなかった」と振り返られたプロジェクトも、その活動の過程で確実に地域社会との関係性を深め、次なる発展への種を蒔いている。重要なのは、それぞれのプロジェクトが地域を舞台に主体的に動き出し、様々な経験を通して得る「過程」そのものであり、その積み重ねこそが、地域とプロジェクトの不可欠な要素となるのではないだろうか。

令和6年度「鹿児島県の近現代」教育研究基盤整備事業 地域マネジメント事業について

鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島県の近現代」教育研究センター長
丹羽謙治

令和7年度がはじまり一か月が経とうとしております。年度末の慌ただしい中で、昨年度（令和6年度）に採択されました地域マネジメント事業の報告書を提出していただきました。各プロジェクトの代表者の方々にはご尽力をいただきましたことに、厚く御礼を申し上げます。

3回目を迎えた令和6年度は、法文学部を初めとして農学部、理工学研究科、総合教育機構から16件の応募があり、そのうち13件を採択いたしました。過去2年は応募されたプロジェクトは一部内容や形態を変更していただいたことはありましたが、ほぼすべて採択してきました。3回目を迎え、競争性と緊張感を高めることを目指し予算規模を若干縮小すること、また広く公募を呼びかけることを行ってみました。予算規模は結果的にほぼ前年度と同じでしたが、企画を立てていただいたのに期待に沿えなくなったプロジェクトが3件出てきました。選に漏れた企画の代表者の方々には、上記のような事情ですので、再度（令和7年度に）企画を練り直して挑戦していただきたいと思っております。

また、プロジェクトを遂行していただきましたの方々には、より新しい企画を練って科研費にチャレンジするなどステップアップにも配慮いただきますようお願い申し上げます。センターの予算も無限ではありません。今後予算規模が縮小することになりましたら、目玉の事業ではありますが、より厳しい査定をしていかざるを得ないことも予想されます。実りある成果をめざしユニークな企画を構築していただきますこと、気概と意気込みを持って活動をしていただきますことをお願いいたします。

最後に、今年度は「鹿児島県の近現代」教育研究センターも4年目に入りますが、次の2年ないしは3年を見据えた中期計画（目標）を検討してまいります。地域マネジメント事業につきましても、改良すべき点、お気づきの点がありましたらセンターにご連絡をいただければ幸いです。会計のことなど変更が難しい面があるかもしれませんが、できるだけ柔軟に対応していく所存です。前年度に引き続き、令和7年度もよろしくお願いいたします。

令和7年5月

「令和 6 年度 地域マネジメント教育研究プロジェクト報告書」

2025 年 5 月 24 日発行

編集・発行 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-30
鹿児島大学郡元キャンパス 総合教育研究棟 3F
TEL : 099-285-7532 FAX:099-285-7625
E-MAIL : kingendajjim@leh.kagoshima-u.ac.jp

印刷・製本 斯文堂株式会社



令和6年度 地域マネジメント 教育研究プロジェクト 報告書

2024



鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター